

ボルネオ奥地における観光開発の可能性：
サラワク州バリオを事例として

加藤 亮¹・斉藤 達也²・増田 美砂³

Potentiality of tourism to develop the interior of Borneo: A case of Bario, Sarawak

Makoto KATO, Tatsuya SAITO and Misa MASUDA

目 次

1. はじめに	60
1-1 背景および目的	60
1-2 方法	61
2. 観光と地域開発	63
2-1 観光と政策	63
2-2 観光によって生じる問題	64
3. 調査地の概要	64
3-1 バリオの立地	64
3-2 ケラビット高原の生活	65
3-3 バリオにおける観光業	70
4. 観光客に対する意識調査	71
4-1 調査方法	71
4-2 バリオを訪れる観光客像	71
4-3 観光対象	78
5. 地域住民に対する意識調査	83
5-1 調査方法	83
5-2 地域住民像	83
5-3 地域住民と観光のかかわり	85

¹筑波大学大学院環境科学研究科 Master's Program in Environmental Sciences, University of Tsukuba

²筑波大学大学院農学研究科 Doctoral Program in Agricultural Sciences, University of Tsukuba

³筑波大学農林学系 Institute of Agriculture and Forestry, University of Tsukuba

5-4	地域住民の考える観光対象	87
5-5	観光業に対する期待と不安	90
6	考察	93
6-1	観光資源としてのバリオ	93
6-2	地域住民の観光業に対する期待と不安から	94
6-3	今後の展望	96
	謝辞	97
	引用文献	98
	Summary	99

1. はじめに

1-1 背景および目的

世界3大熱帯雨林地域の1つであるボルネオ島では、伐採やプランテーション開発、地下資源の採掘に加え、1997/98年に発生した大規模な森林火災により、森林が急激に劣化した。外部資本による開発は、同時に商品経済を奥地まで浸透させることになり、かつては自給的な生活を営んでいた地域社会の変容は、さらに生態系の破壊を生み出すという悪循環をもたらしている。

そこで本研究では、地域社会が主体となった開発に着目し、特に地域の自然資源ならびに伝統文化を資源とした観光開発の可能性を、マレーシア側に位置するサラワク州の事例をもとに明らかにすることとした。

観光業が地域に与える影響は大きく、国連開発計画では早くからその可能性に着目し、実施機関として1975年に世界観光機関(The World Tourism Organization, 以下WTO)を設立した。1995年にはWTOと世界旅行観光会議(World Travel and Tourism Council), および「アジェンダ21」のフォローアップのために設立された地球会議(The Earth Council)の3者が「観光のためのアジェンダ21」を作成し、行政、非営利組織、企業が一体となって取り組むべき課題を列挙した。

このような流れの中で、経済効果を活かしつつ、同時に悪影響を抑制した観光形態が模索されるようになった。現在、ソフト・ツーリズム、ローインパクト・ツーリズム、責任ある観光(responsible tourism), 適正観光(appropriate tourism)といった新たな観光のあり方や、エコツーリズム、グリーン・ツーリズム、カルチュラル・ツーリズム、スタディ・ツアーなど地域資源の保全に配慮した観光形態が提唱されている(小方, 2000; 塚本, 2001)。

マレーシアにおいても、文化芸術観光省(The Ministry of Culture, Arts and Tourism)が、世界自然保護基金マレーシア(World Wide Fund for Nature Malaysia, 以下WWF-マレーシア)の協力のもと、持続的観光開発に力を注いでいる。WTOの報告によれば、2000年のマレーシアにおける国際観光客到着数は1,000万人を超え、1999年に比して28.9%増、2000年から2001年にかけても25.0%増加した。これは世界的にみても驚異的な伸び率であった(WTO, 2002)。また



図1 バリオの位置

出典：Environmental Systems Research Institute (2000)の地図をもとに作成

サラワク州政府は、2003年をビジット・サラワク・イヤー（Visit Sarawak Year）と定め、各地でイベントやワークショップなどを開催している¹⁾。さらに州観光相は、2004年をエコバイオ・ツーリズム・イヤー（EcoBio Tourism Year）と定め引き続き観光業の発展に力を入れていくことを表明している（Borneo Post, 2003）。

こうした急激な開発は、ともすると利潤の分配をめぐり地域社会にひずみを生じたり、地域のキャパシティを超えた観光客の訪問が環境破壊や汚染を引き起こしたりすることになる。そこで事例として、インドネシアとの国境に位置しながら、すでに観光開発の萌芽がみられるミリ省(Miri Division) マルディ郡 (Marudi District) ロングラマ区 (Long Lama Sub-district) のバリオを選んだ(図1)。そしてバリオにおいて発展しつつある観光業の現状を把握するとともに、地域住民をはじめとする関係者が観光開発に対して抱く期待や問題点に即して分析することにより、当該地域における今後の可能性、さらには同様の条件下にある他地域に対する適用可能性を検討した。

1-2 方法

バリオでは、ケラビットとよばれる人々がロングハウスにおける伝統的生活を営んでいる。

バリオの名称は、図2の左列に示すロングハウス群から構成される地区だけでなく、特定のロングハウス (Bario Asal) を示すこともある。また空港および保健所や学校などの行政サービス機関の集中した区域をあらわすこともある。本稿においては、特にことわりがない限り、この空港周辺地域をバリオとよぶことにする。

方法としては、バリオの観光業を構成するものとして、①観光客、②観光媒体、および③観光

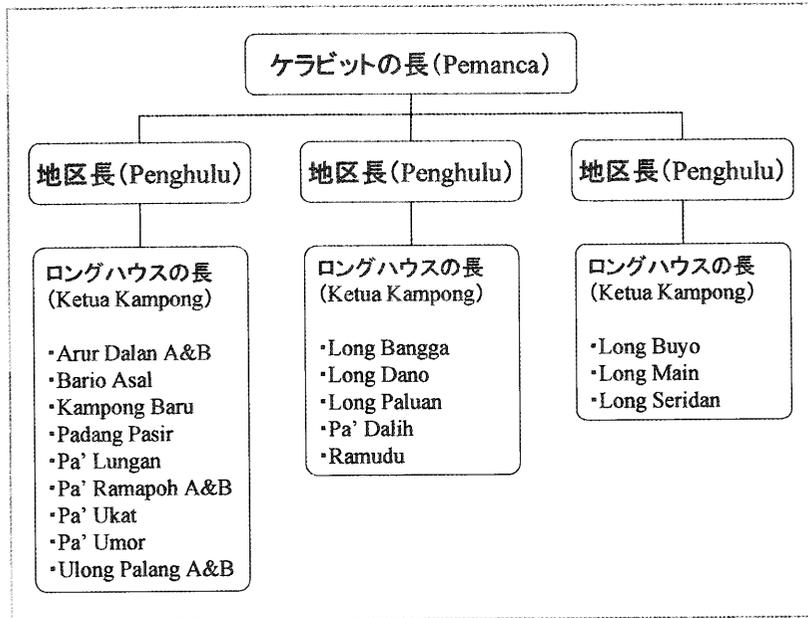


図2 ケラビットの行政組織

対象という3つの要素を予め想定した。さらに②を構成する人的要素として、宿泊施設オーナー、ガイド、および商店・飲食店経営者、③については宿泊施設オーナー、ガイド、ロングハウスの住民をとりあげ、それぞれに対するアンケートおよびインタビューを実施した。

①に関しては、バリオ内全ての宿泊施設のオーナーに対し、調査期間中に訪れた全ての宿泊客に英語のアンケート用紙を配布し、バリオを離れる際に回収することを依頼した。②および③に対してはインタビューをおこなった。バリオの住民の多くはロングハウスと総称される長屋で生活をしており、それぞれのロングハウスが共同体を形成している。今回の調査ではバリオ地区にある9棟のロングハウスのうち、空港から比較的近くにあり、観光客との接触も多いと考えられるロングハウス1棟と、少し離れた場所にあるロングハウス2棟をサンプルに選んだ。

現地調査に際しては、まず2002年8月に予備調査を行い、観光客の集中する2003年7月から2003年9月にかけて本調査を実施した。本調査に際しては、サラワク州計画局(State Planning Unit)に調査許可の申請を行い、調査許可証およびプロフェッショナルビザを取得した。またサラワクでは、省—郡—区と細分化された行政機構のさらに末端に、図2に示すケラビットの長(pemanca, 以下プマンチャ)が位置し、バリオに居住している。そこでそのプマンチャおよびバリオ地区長(penghulu, 以下プンフル)を表敬し、調査の目的、方法について説明を行った。これらの手順を踏まえることで政府関連機関、組織からは資料の提供を、地域住民からは協力を得ることができた。

2. 観光と地域開発

2-1 観光と政策

行政が観光業に関与し始めたのは、国際観光の先進地域であるヨーロッパからであったとされる。1910年のフランスに始まり、その後1934年までの間に、日本、スイス、イタリア、南アフリカ、ドイツ、イギリス、オーストラリア、カナダなどが続いて行政機関を設立し、観光客の誘致に力を入れた（岡本，2001）。

第2次世界大戦後は、国際相互理解を導く1つの方法としての有用性も認識されるようになり、1946年に政府観光機関国際連合(International Union of Official Tourist Organization, IUOTO)が結成された。1963年には国際観光の促進を目的とする国連主催の「国際旅行・観光会議」(The United Nations Conference on International Travel and Tourism)が開催され、続いて1967年、「旅を通じた理解は世界平和へのパスポート」(Understanding through travel is a passport to the world peace)のスローガンのもと、「国際観光年」(International Tourism Year)が設けられた。1975年にはIUOTOが政府間機関WTOへと改組され、WTOは旧IUOTOの活動を引き継ぎ、さらに発展させていった(山上, 1997; 岡本, 2001)。2003年には、1985年以来18年ぶりに新たな国連の専門機関となることが承認されたことから、観光産業に対する国際社会の関心の高さがうかがえる。

政府が国際観光開発に関心をもつようになったのは、その平和構築機能だけでなく、外貨獲得効果にもあった。1960年代におけるジェット機の登場が、観光客の行動範囲を飛躍的に広げ、1970年代のジャンボジェット機の登場は人の大量移動を可能にした。これらの技術革新はそれまで観光業とは縁遠かった周辺地域にも観光客を運ぶことを可能にし、見えざる貿易としての観光業の側面がクローズアップされるようになった(岡本, 2001)。

観光業は、観光収入のような直接的な経済効果だけでなく、様々な波及効果を生み出す。例えば、滞在に必要な宿泊施設はもちろん、観光地への観光客の移動を確保するためには交通機関や道路の整備が必要になる。観光業は地域開発の視点からも注目され、国際観光だけでなく国内観光の振興も積極的に行政に取り入れられるようになってきた。行政側の役割としては、観光業を支える基盤整備のほかに、旅行規則の撤廃・緩和といった制度面、国・自治体・各種団体による広報などの普及面を担ってきた(東, 1999)。

サラワク州に初めて観光業に関連する公的機関が設立されたのは1976年である。その観光開発公社(Tourism Development Corporation)は、1985年に最初のマスタープラン(1st Tourism Master Plan)を策定し、1995年により詳しい内容の第2次マスタープランを策定した。観光業と開発はともに発展させなければならないとの考えのもと、1995年には国家エコツーリズム計画(National Eco-tourism Plan)が文化・芸術・観光省とWWF-マレーシアの協力のもとに作成された。この中には行動計画やガイドラインの他に、10カ所の重点地域および52の事業提案が示されており、事業提案にはバリオも含まれている。

2-2 観光によって生じる問題

観光業に関しては、長い間「観光客は写真以外のものは撮らないし、足跡以外のものは残さない」ということが信じられていた。このような観光が純粹でクリーンな産業であるというイメージにより、観光業の発展には優先権が与えられてきた(プログ, 1995)。しかし観光業の拡大とともに、自然破壊や環境汚染、地域社会に対する様々な悪影響といった弊害も問題視されるようになった。

1990年代に入ると、環境問題への関心の高まりもあって、「持続可能」な産業のあり方が問われるようになってきた。観光業により引き起こされる多くの悪影響は、経済効果に過度に傾斜した結果であったとされ、またその経済効果に関しても、地元への波及という点からは疑問視されている。巨額の投資をともなう誘致企業による大規模開発は、大量の集客を可能にし、一見大きな経済効果を地域にもたらすかにみえるが、次のような欠陥をもつために地域の経済発展につながらないことも多い(保母, 1990)。

- 企業は企業系列の利益を優先する。
- 利益が企業の本社のある大都市に流出する。
- 地元企業でないために、環境や地域雇用などにおける社会的責任に欠くことがある。
- 進出や撤退、操業などの意思決定は、企業論理にしたがってなされ、地域住民の意向を反映した計画的な経済振興とは結びつきにくい。

こうした問題の裏返しとして、最初に述べた責任ある観光や適正観光といった観光倫理が提唱され、エコツーリズムのような観光形態が脚光を浴びるようになったのである。2003年にクアラルンプールで開催された WTO アジア太平洋会議では、観光産業に対する認証制度の導入を提言している(WTO, 2003)。

3. 調査地の概要

3-1 バリオの立地

バリオは北緯3°44′、東経115°28′の辺りに位置し、標高は約1,100mである。周囲を2,000m級の山に囲まれた一帯はケラビット高原とよばれ、インドネシアに接するとともに、サラワク第2の河川であるバラム川の源流域をなしている。

バラム川はケラビット高原から一旦沿岸とは逆の南に向かって流れ、大きく西に褶曲してから北に向かう。しかもその航行限界はマルディまでで、空路以外でバリオにアクセスするには歩くしかない。道路のなかった時代に沿岸からバリオに達するには、深い森を抜け、山を越え、少なくとも3週間以上かかったとされる(Bala, 2002)。今日では、リンバン-ラワス省の沿岸から南のインドネシア国境まで通じている道路の終点、バクララン(Ba'Kelalan)から西南に向かって歩くと、2、3日でバリオに到達する²⁾。また伐採トラックに便乗して最寄りの地点で降り、そのあ

と歩くという方法もある。

サラワクの森林の大半には、保護区を除きすでに一通り伐採が入っており、二巡目に入った区域もある。2002年5月19日に観測された衛星画像からは、次の点が読みとれる（図3）。

- ケラビット高原の西に連なる稜線のさらに西側は自然保護区に指定されており、森林植生に覆われている。
- しかし高原の北部稜線の北には、沿岸から内陸部に向かう林道が迫っており、尾根筋に張り巡らされた林道網が確認できる。
- 高原においては、低地や谷筋に、森林とは異なる植生が確認できる。また田植えに向けて水田に水をはっている様子もうかがえる。一方、山腹から尾根にかけての植生には変化がみられないことから、現在焼畑はあまり行われていないと考えられる。

バリオへの通常のアクセスは空路に限られる。バラム川河口にある都市のミリ(Miri)、もしくはミリから南東約40kmにあるマルディ(Marudi)との間を、19人乗りのプロペラ機(Twin-Otter)が往復している。所要時間はミリから約1時間、マルディからは約50分である。ミリを離陸するとすぐに眼下に大規模なオイルパームのプランテーションが広がり、内陸に入るにつれ、尾根を縫う伐採道路や斜面に横たわる伐倒木をみることができる。伐採道路が途切れ、ケラビット高原の西をとりまく保護区に入ると地形は急峻さを増し、その分水嶺を超えるとすぐに飛行機は高度を下げ、バリオ空港への着陸態勢へと入っていく。

3-2 ケラビット高原の生活

ケラビットの起源は未だ明らかにされていない部分が多いが、500年以上前からケラビット・ハイランドで生活をしてきたとされている。首狩りの習慣をもっていた下流のイバンやカヤン、クニャーといった他の民族から身を守るため、インドネシア側にかけて広がる高原地帯に孤立して、焼畑による陸稲栽培や、狩猟、採集により生活していた。ケラビット高原には塩泉が分布し、塩を自給できたことも、長らく奥地で孤立していた原因の1つと考えられている(Harrison 1949)。

男性は円錐状の帽子を被り、伸ばした髪は後ろで1つに束ねてとめていた。耳には2つずつ穴を開け、上部の穴にはヒョウの牙、下の穴には大きな輪をつけていた。穴は少しずつ大きくなり、特に下の穴は、輪をつけたときには肩に届くほどであった。女性は半円状の帽子を被り、両腕と両足ほぼ全体に刺青を入れていた。また、男性と同じく両耳の下部には大きな輪をつけていた(写真1)。

今も多くの人々が住むロングハウスは、もともと村落共同体を形成しており、ロングハウスの長(*ketua kampung*)が住民の意見の調整などを行っていた。儀式や農作業に際しては、共同労働を行い、日常的に他の家族と深く関わりをもちながら生活していた³⁾。現在のロングハウス内部は、個室を除き、昔と同様自由に往来できるようになっている。囲炉裏の設えられた部分は生活の中で特に重要な意味を持ち、家族が調理をしたり暖をとったりするだけでなく、社交の場でもある(写真2および写真3)。現在バリオにあるロングハウスでもっとも大きいものは25戸からな

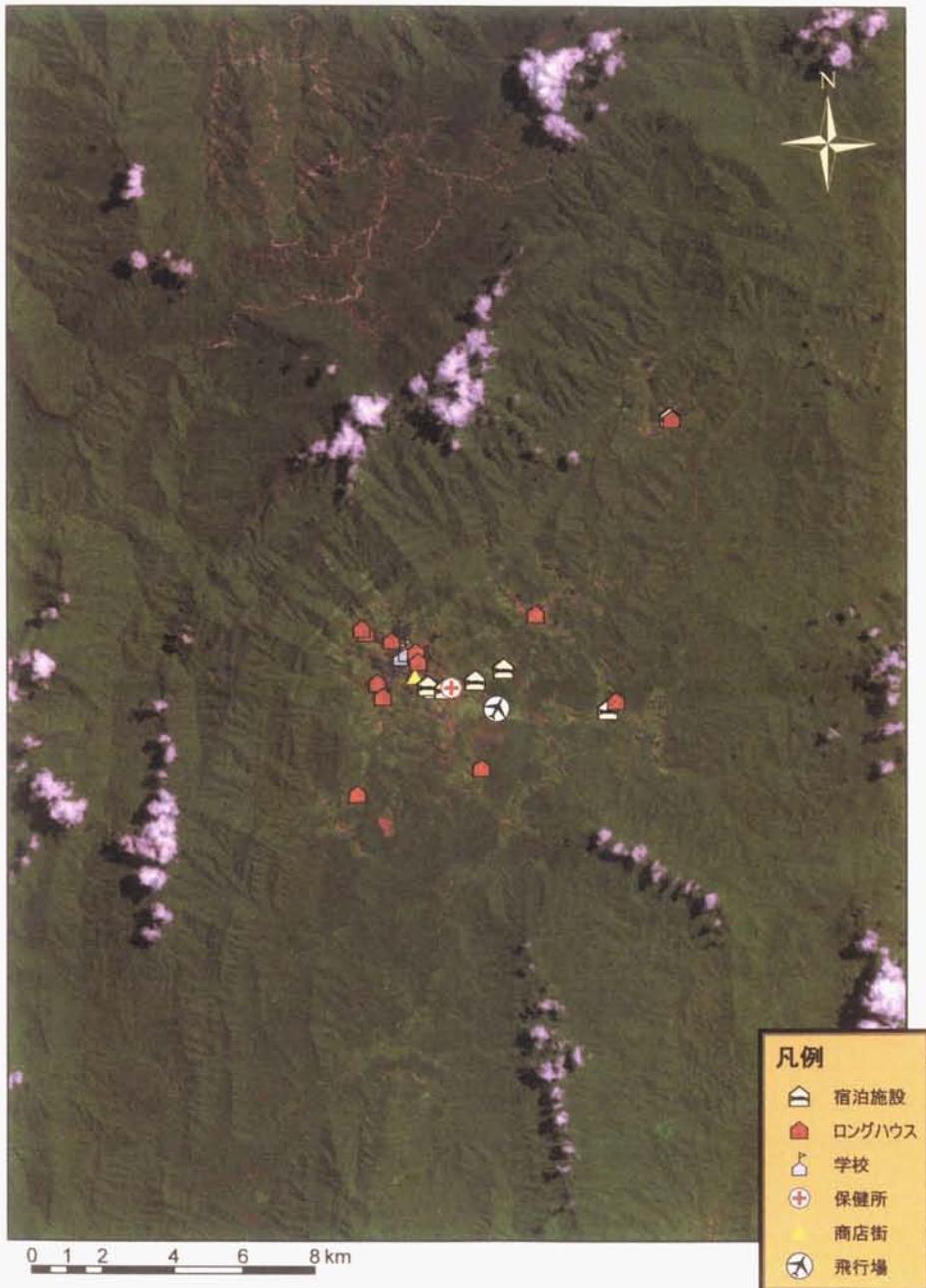


図3 ケラビット高原の周辺

注：背景は、2002年5月19日に撮影された Landsat/ETM+ のデータ (Path : 118, Row : 057) の Band5, Band4, および Band3 を、それぞれ R, G, B に割り当てて作成したものである。



写真1 ケラビットの女性
(2003年8月4日、加藤撮影)

り、全長は100mを超えている。

かつて人々は自然や動物から禁忌や前兆を読み取っていた。例えば、「仕事に行く途中、鳥が自分の前を横切ると悪い予兆であり、家に戻って休まなくてはならない」「結婚した次の日に黒い蛇をみたら離婚しなくてはならない」などがあった。さらに、動物の鳴き声などからも禁忌や前兆を読み取っていた。また、ケラビット・ハイランドには数々の巨石遺跡が残っており、これらも土着の宗教と関係の深いものと考えられている (Schneeberger, 1979; Harrisson, 1949, 1992)。

現在、バリオに住む多くの住民はキリスト教を信仰している。ほとんどのロングハウスには教会があり、毎日のように礼拝や集会が行われている。キリスト教がバリオに最初に紹介されたのは1928年と言われている⁴⁾。しかし本格的にキリスト教が普及したのは第2次世界大戦後のことであり、伝統的信仰や習慣に影響を及ぼしただけでなく、学校教育や英語教育ももたらした。1946年にはパ・メイン (Pa'Main) に最初の学校が建てられ、1962年にはバリオに小学校 (Lower Primary School) が、さらに1967年には同じくバリオに中学校 (Secondary School) が建てられた (Bala, 2002)。

マレーシア全体のケラビット人口は、約5,000人とも6,000人ともいわれ、正確な数は不明であるが、少数民族の1つである。そのうちバリオ地区には約1,100人⁵⁾が住んでおり、数の上でも、また、空港があり、教育機関を2つ有しているため周辺の集落から情報、物資、人が集まることからケラビット高原の中心部をなしている。主な産業は稲作である。伝統的に行われてきた焼畑による陸稲栽培は現在ほとんど行われず、排水路を備えた天水田で一期作が行われている。

食生活については、主食である米、畑から供給される野菜や果物に加え、狩猟採集によってもたらされる食材も日常的に利用され、食料の自給率が高い。しかし空路の便数が増えるにつれ、様々な加工食品が店頭に並ぶようになり、砂糖やインスタントコーヒー、食用油などは日常的に消費されている (表1)。徐々にではあるが、食生活が変化していることがうかがえる。

変化しているのは食生活ばかりではない。バリオで中学を終えた若者は、マルディやミリの高校へ進学し、それらの若者は教育期間が終わった後も都市部にとどまることが多い (Bala, 2002)。ケラビット以外の民族集団と結婚した場合はUターンも生じず、都市部にいる家族、親族の存在が、さらなる人口の流出をもたらすことになっている。その結果、ケラビット高原全体で過疎化、高齢化が顕著となり、労働力不足は、隣接するインドネシアからの出稼ぎ労働者によって補われている。

バリオ中心部だけでも水源は3カ所あり、ほとんどの家庭は自己負担したパイプやホースで水を引いている。水不足の心配はないが、パイプの故障や詰まりが原因で一時的な断水になること

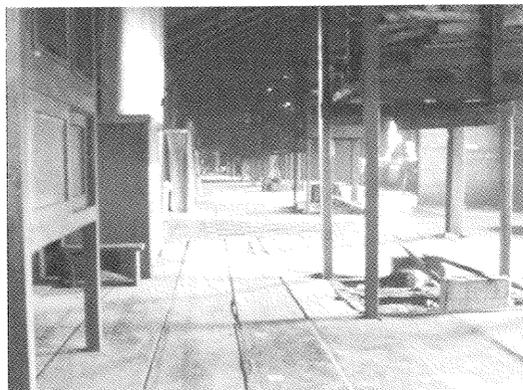


写真2 ロングハウス内部の台所部分
(2003年8月26日, 加藤撮影)



写真3 ロングハウス外観
(2003年8月25日, 加藤撮影)

はある。

電気についてはかつて小規模水力発電所が建設されたが、すぐに故障し、一部の世帯ではディーゼル発電機による自家発電、政府の建物やごく一部の家庭でソーラーパネルによる発電がなされている。発電機を共有しているロングハウスもあり、住民が維持費を分担している。

電話は空港、マーケット、診療所の3カ所に設置されている(図4)。2002年から州政府の援助により集落の中心部に「Eバリオ」と呼ばれるインターネットへの接続環境が整った施設が導入さ

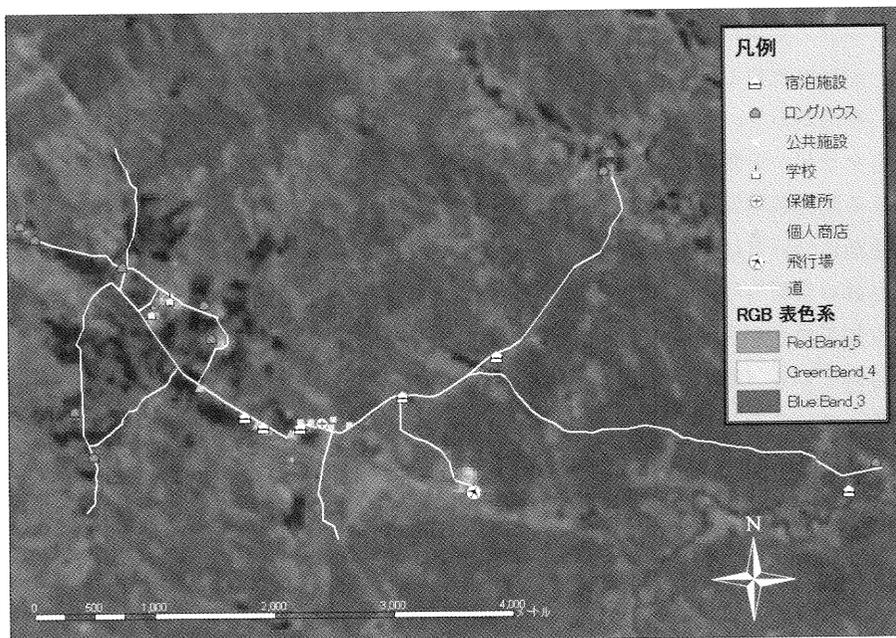


図4 ケラビット高原中心部

注：図3で用いた画像の背景に、GPSで計測した情報を重ねた。

表1 バリオ内の店（全14）で販売している商品と提供される飲食、および取扱店数

品 目	食 事	取扱店数*
小袋に入った菓子，清涼飲料水		9
缶詰各種，ろうそく	コーヒー，紅茶，ミルク，ホ ーリック，ミロ	8
インスタントコーヒー，乾麺（ラーメン），砂糖	焼きそば（ミーゴレン）	7
卵，食用油，ビスケット		6
ミロ，ミネラル水，石鹸，歯磨き粉，ナイフ，バ イク用オイル	ラーメン（ミー）	5
米，シャンプー，生理用品，くし，タバコ，		4
飴，紅茶，ビール，干物，乾麺（米），醤油，にん にく，ヘアバンド，サンダル，帽子，軍手，靴， 食器洗い用スポンジ，洗剤，歯ブラシ，皿，鍋， 電池，ペン，蚊取り線香，ネックレス（土産用）， 土産物（ナイフ）	カレーヌードル（ラクサ），焼 き飯（ナシゴレン）	3
小麦粉，塩，豆，粉ミルク，パン，ジャム，スパ イス各種，たまねぎ，長靴，服，時計，髭剃り， ティッシュ，ブラシ，トイレットペーパー，洗濯 バサミ，おたま，ポット，コップ，ライター，ス プーン，懐中電灯，籠，傘，ノート，紐（ナイロ ン製），バケツ，ビニルテープ，電球，建築資材材 各種，バイク用タイヤチューブ，ガソリン，軽油， おもちゃ各種，土産物（盾，吹き矢）		2
片栗粉，ケチャップ，シロップ，ベーキングパウ ダー，鶏肉，イヤリング，プレスレット，制服， 布，マット（寝具），ヘアジェル，哺乳瓶，やかん， ほうき，鎌，鋏の刃，種子各種，釣り糸，ショベ ル，肥料，ガスボンベ（プロパンガス），ガスラン プ，カッター，封筒，大工道具セット，ジェネレ ーター，鍵，コンセント，花瓶，音楽テープ	カキ氷，ライスケーキ，朝食 セット，バナナフリッター	1

*調査期間中バリオにおいて営業をしていた商店は15軒あったが，そのうち協力を拒んだ1軒を
除く14軒に聞き取り調査を行った結果。

れ，施設は住民に有料で開放されている。新しい通信の手段，情報入手の手段として注目されて
おり，観光開発をすすめる上でも有力な手段となっている。

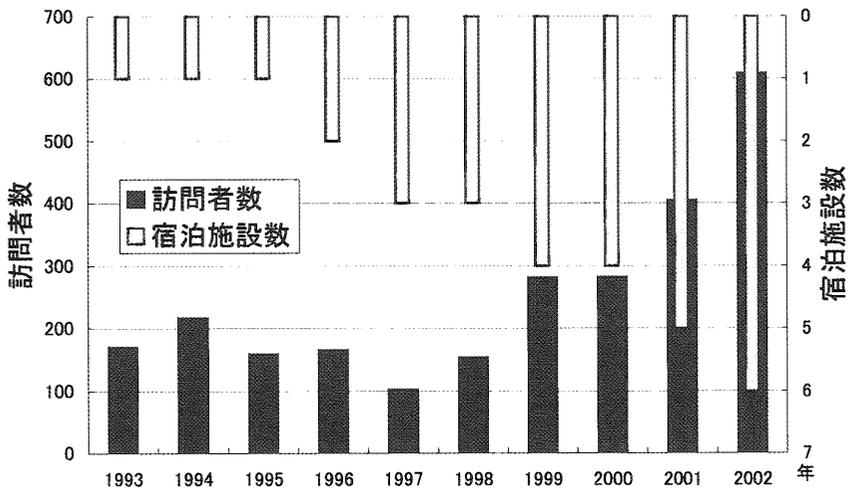


図5 バリオへの訪問者数と宿泊施設数の変化

出典：バリオ内全宿泊施設ゲストブック記録、および宿泊施設オーナーへの聞き取り調査より作成

3-3 バリオにおける観光業

バリオにおける宿泊施設の開業は1980年代にはすでに始まっていた。しかし、飛行機の便数は少なく、また、ガイドブックに紹介されていなかったため、観光客の訪問は少なく、主に政府関係者の出張時の宿泊場所として、あるいは研究者などの長期滞在場所として利用されていた⁶⁾。

しかしバリオーミリ間の人や物資の移動が増えるにつれ、バリオ空港は整備され、便数も増えてきた。それとともに、ボルネオ島を大規模森林火災が襲った1997/98年の一時的な落ち込みを除き、宿泊施設や宿泊客数も増えつづけている（図5）。

Eバリオ導入以前は、観光客の多くはガイドブックに紹介されている2軒の宿泊施設を目指すか、知り合いから宿泊施設を紹介してもらい、宿泊をしていた。事前に宿泊施設と連絡がつかず、空港で待っている宿泊施設オーナーやガイドに直接交渉して宿泊先を決める観光客もいた。飛行機がバリオに離着陸する際は人を迎える人、荷物を迎える人、人を送り出す人、荷物を送る人など集落の人が集まっているため、突然の来客にも空港に居合わせた人々が対応し、問題はなかったようである。現在はガイドブックの他にインターネット上で宿泊案内を出している宿泊施設もあり、Eバリオとともに、観光客にとっても宿泊施設オーナーにとっても計画が容易になった。

バリオが観光客に提供できる観光活動は、トレッキング、登山、ロック・クライミング、野生動物観察、ロングハウス訪問、ロングハウス宿泊、伝統的ダンスや歌の見物、釣り、ハンティングなどである。観光客はあらかじめ宿泊施設オーナーに希望を伝えることもあるが、到着してから相談し、日程を決めることも多い。到着した日は宿泊施設に移動し、希望を確認または相談、

村の中を散策する程度で、本格的な行動に移るのは通常到着した次の日からになる。

4. 観光客に対する意識調査

4-1 調査方法

2002年7月24日から2002年8月27日までの調査期間中、バリオ内全宿泊施設利用者数は各宿泊施設のゲストブックの記録を合計すると86人であった。滞在者の中にはゲストブックに記入をしないものもいるので、実際の施設利用者数はおおよそ100人前後であると推測される。これらの宿泊客個々に記入してもらった上回収したアンケート数は68通であった。そのうち観光客の回答は55通であり、全回収数の80.9%を占めていた。残りは公務や商用で訪れた人々である。

アンケートの設問は、「国籍」、「性別」、「年齢」、「同伴者」、「扶養家族数」、「最終学歴」、「職業」、「年収」からなる本人の属性と、「海外旅行経験数」、「バリオを訪れた目的」、「これまでバリオを訪れた回数」、「観光でバリオを訪れた回数」、「今回の旅行の全日程数」、「バリオ滞在日数」、「バリオで1日に使った費用」、「自国を離れる際にすでに計画された訪問であったか」、「他の観光地を訪れる予定」、「バリオを知った最初の情報源」、「バリオ観光の魅力はなにか」、「21項目のバリオ、およびバリオの観光の特徴に対する重要度と満足度」である。最後の設問を除く全ての項目に対して、あらかじめ予想される回答および自由記述の「その他」を用意し、チェック方式で回答してもらった。「バリオ、およびバリオの観光の特徴に対する重要度と満足度」の項では、重要度と満足度をそれぞれ5段階で評価してもらった。また、アンケートの最後に自由記入欄を用意し、バリオの観光業に関する意見を記入してもらった。

4-2 バリオを訪れる観光客像

「国籍」については、ヨーロッパ人が全体の80.1%を占めていた。反面、北米から1人も訪れていない理由としては、エコツーリズムで知られるコスタリカをはじめ、中南米の熱帯雨林が近くにあり、わざわざ太平洋を越えて東南アジアの熱帯雨林まで足を運ぶ必要がないという理由によるものと考えられる。

国別にみるとイギリスが最も多く、全体の40.0%を占めていた。次いでドイツが10.9%、マレーシア国内からの観光客は9.1%で3番目であった（図6）。サラワク州はかつてイギリス植民地であり、バリオにはイギリス軍が駐留していた時期もあった。また現在、観光客ではないがイギリスのトレック・フォース（Trek Force）やワールドチャレンジ（World Challenge）というNPOが定期的にサラワク州内でボランティア活動や体験学習を実施しており、活動場所の1つとしてバリオも選ばれている。そのような事実が特にイギリスからの観光客数が多いことと関係しているのではないかと考えられる。

「性別」については、男性が52.7%、女性が41.8%、不明が5.5%であり、男女間に大きい違いはみられなかった

「同伴者」については、全体の45.5%が友人とバリオに来ていた。次いで単独が25.5%、家族

と来た人が23.5%であった(図7)。友人は多くの場合異性であり、また、家族も多くの場合が夫婦であった。男女比に大きな開きがない理由は、これらの点から説明できる。また「扶養家族の数」をみると、扶養家族をもたない人が全体の87.2%を占めており、独身あるいは子どものいない夫婦が大半を占めているといえる。

「今回の旅行の全日数」は数に大きな開きが見られたため、8区分(1～7日, 8～14日, 15～30日, 31～60日, 61～90日, 91～180日, 181～360日, 361日以上)にわけて整理した。最も多かったのが15～30日であり32.7%, 次いで31～60日で18.2%であった(図8)。旅行の全日数が61日を越える観光客も多く、全体の25.5%を占めていた。海外、特にヨーロッパ地域からの観光客にとってバリオを訪れることは時間を要することである。観光客は長期休暇を利用して訪れている、もしくは、比較的自由な時間をもてる人であると考えられる。

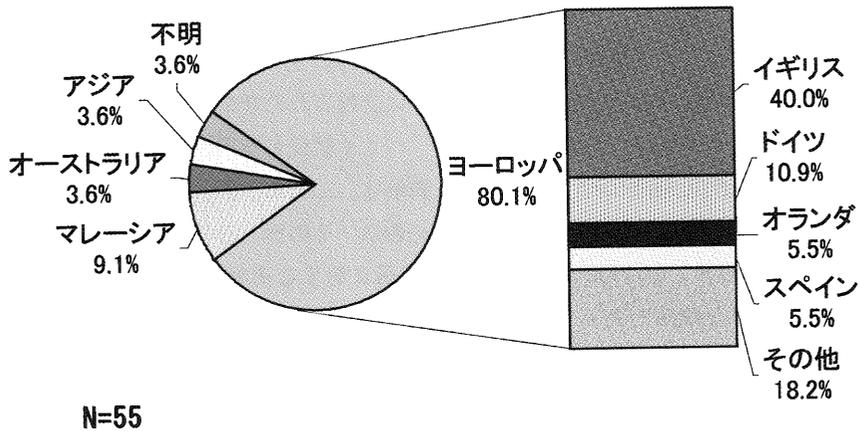


図6 観光客の国籍

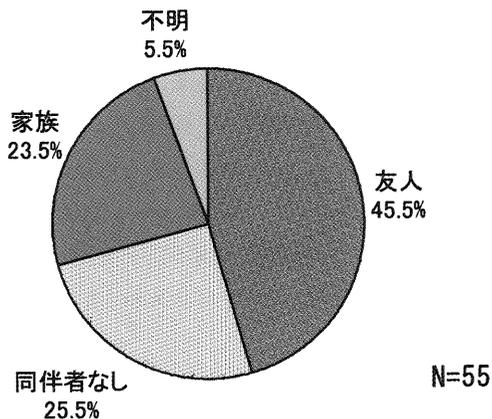


図7 観光客の同伴者

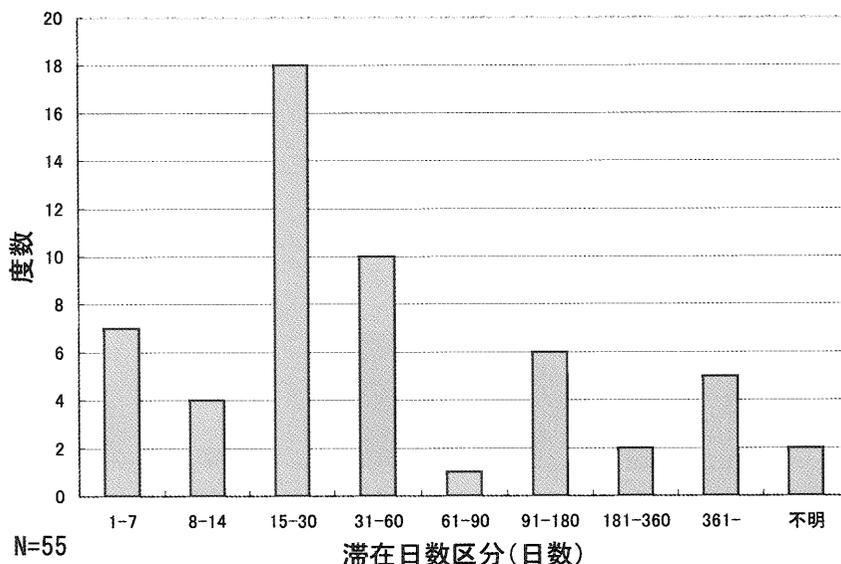


図8 バリオを訪問した観光客の全旅行日数

しかしながら「バリオ滞在日数」をみると、「今回の旅行の全日数」にみられたような大きな開きはなかった。最も多い4-6日(50.9%)をはじめ、1週間未満の旅行者が83.6%を占めていた(図9)。不明の回答を除くと、2週間を超えて滞在する人々はいない。また、「自国を離れる際にすでに計画された訪問であったか」の質問に対しては全体の67.3%が計画していたものであると回答した。

バリオへの航空便は、2003年8月時点で週に9便あったが、観光客が集中する6月から9月までの間は事前の予約なしに飛行機の席を取ることが難しい状況であった。ガイドブックにも、「航空便は天候によって左右され、キャンセル待ちにより席を得ることは難しい。旅の日程にはゆとりをもたせるべきである」と記されている(Lonely Planet, 2001)。したがって旅程全体が短期の場合は、事前の計画が不可欠である。逆に、自国を離れる際にはバリオを訪問することが計画に入っていなかった人の全旅行日程は、計画していた人と比べ長い傾向がみられた(図10)。すなわち、バリオを訪れる観光客は、予めガイドブックなどを参考に計画的に訪れる人々と、長期旅行の途中で耳にした情報などをもとに飛び入りで訪れる人々との2通りみられるが、いずれのタイプも、滞在日数はあまり長くない。

「他の観光地を訪れる予定」を問う質問には、80.0%の人が他のバリオ以外の観光地を訪れる予定をもっている、もしくは訪れた後に来ていたと回答していた。全体の45.5%の人がマレーシアの観光地だけでなくマレーシア以外の国を訪れる予定がある、もしくは訪れた後に来ていたと回答していた(図11)。他の観光地を訪れる予定のない観光客は7人いたが、内5人はマレーシア国内からの観光客であった。あとの2人はシンガポールからが1人とイギリスから1人であった。

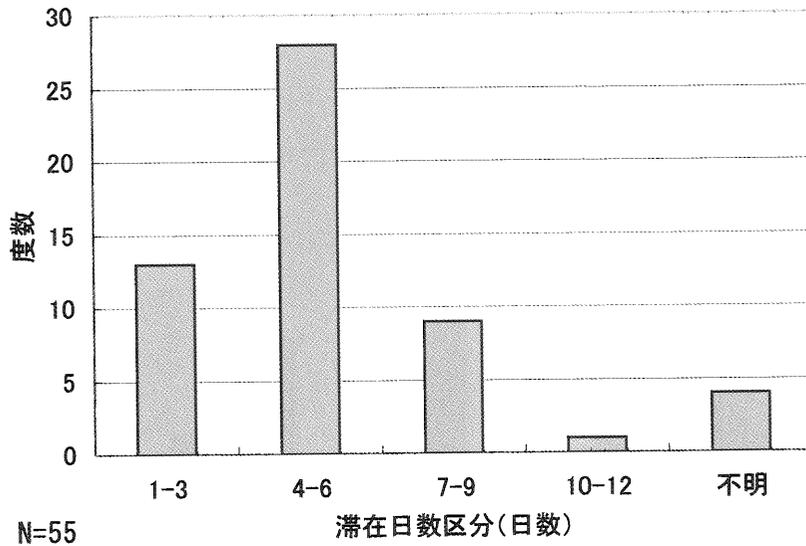


図9 観光客のバリオ滞在日数

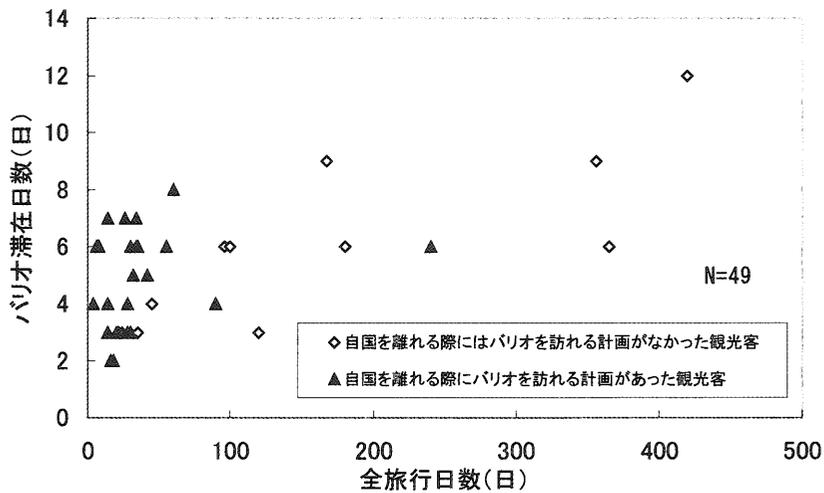


図10 全旅行日数、バリオ滞在日数、およびバリオ訪問計画の有無の関係

「1日の滞在費」については、31マレーシア・リングギット（以下RM）から60RMと回答した人が最も多く、全体の38.2%の人が挙げていた（図12）。因みに、2003年8月時点で、1RMは約30円である。

バリオ内の宿代は、どのロッジでもほぼ同じで、1人当たり1泊3食付きの料金が50RM前後

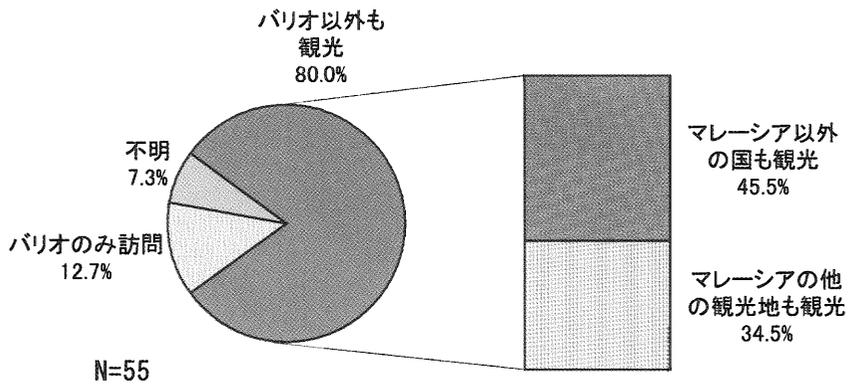


図11 観光客の訪問地

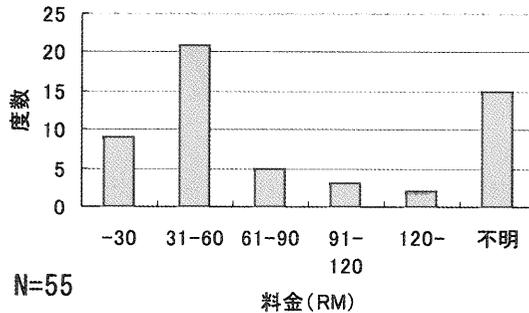


図12 観光客の1日の滞在費

であった。トレッキング中は大別すると森林内にある簡易宿泊施設，またはテントを利用する場合と，目的地や途中にあるロングハウスに滞在する場合がある。簡易宿泊施設，またはテントを利用する場合は持参した食料を調理し，持参した寝袋を利用して寝るが，ロングハウスに滞在する場合は，1人当たり1泊30RM前後を宿泊する世帯に支払い，寝床と食事を提供してもらう。ガイド料は1日65RMである。これは人数で頭割をすることができるため，個人でトレッキングをするより同伴者がいる方が滞在費の負担は軽くなる。これらの料金をふまえ，2人のグループを想定すると，トレッキングの際にかかる1日1人当たりの費用は，上記回答の31RMから60RMという料金に相当する。

「職業」は会社員や公務員，団体職員などが全体の49.1%，次いで自営業が18.2%，無職が14.5

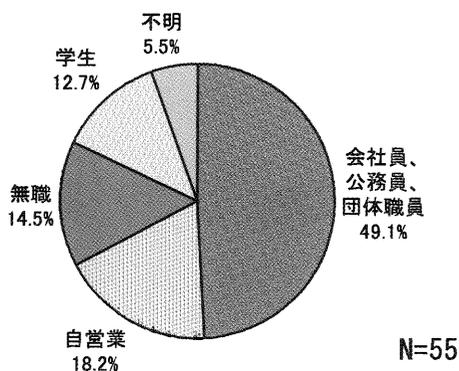


図13 観光客の職業

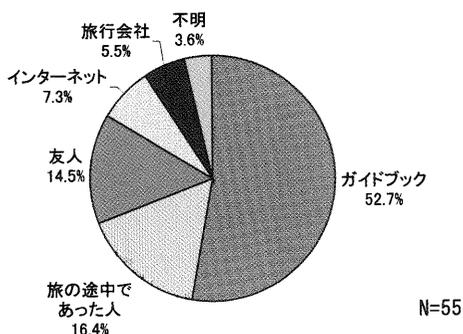


図14 観光客が最初にバリオを知った情報媒体

%, 学生が12.7%となっていた(図13)。また, 公務員であるが長期休暇をとっている人, 所属団体に籍をのこして休職している人, 旅行のために会社を退職した人などがいた。

「バリオを知った最初の情報源」では, ガイドブックと回答した人が最も多く, 52.7%を占めていた。次いで多いのが旅の途中で会った人からであり16.4%, 友人が14.5%と続いていた(図14)。すなわち, 後二者を合わせた30.9%は, 広告の類ではなく, バリオの評判をきいた上で訪れているとみることができる。

「年収」は1万米ドルから5万ドルと回答したものが最も多く, 52.8%であった。次いで多いのが5万から10万ドルと回答した人で14.6%, 10万ドル以上も2人存在した。他方, 収入がない人も3番目に多く, 9.1%存在した(図15)。ただし, 先にみた「職業」の項で学生と答えた7人のうち, 収入なしと答えた人は1人だけであり, 後の学生はなんらかの収入源をもっていた。収入なしと答えた5人はいずれも20代, 30代で, 仕事を一時的にやめて旅に出ている可能性が考えられる。

「年齢」は, 最も多いのが30代で全体の41.9%, 次いで20代が34.5%であった(図16)。30代,

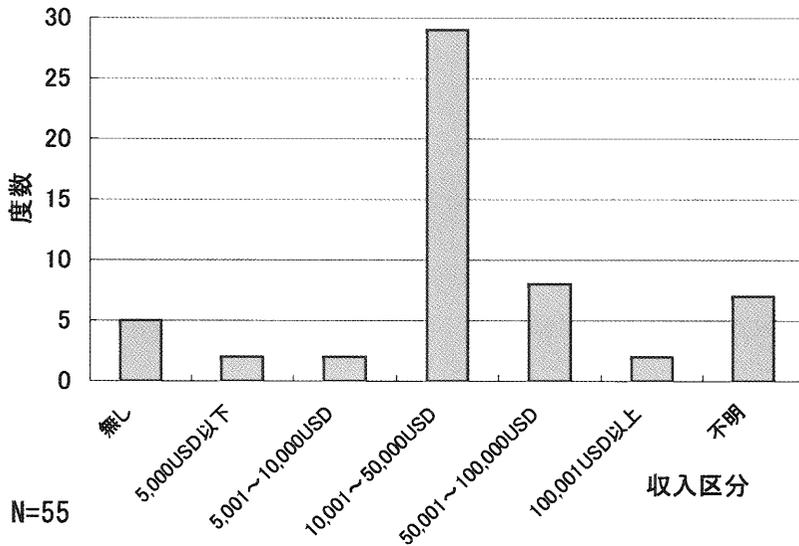


図15 観光客の年収区分

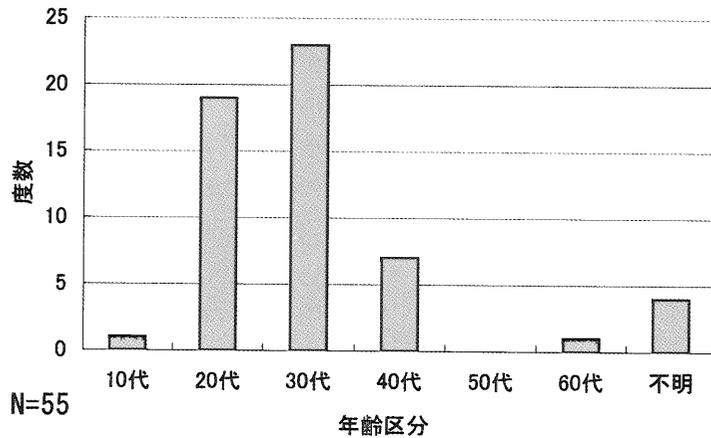


図16 観光客の年齢

20代が全体に占める割合は76.4%であり、若い世代の観光客が多いといえる。

「海外旅行経験回数」は10回以上と回答したものが全体の65.5%を占めていた。次いで1, 2回という回答者が12.7%, 5~9回が9.1%であった。海外旅行に慣れた人々がバリオを訪れていたことがわかる (図17)。

「最終学歴」は大学が最も多く、56.4%を占めていた。次いで多いのが大学院以上で、16.4%であった。大学以上の最終学歴を有する人々が全体の72.8%を占めていた (図18)。

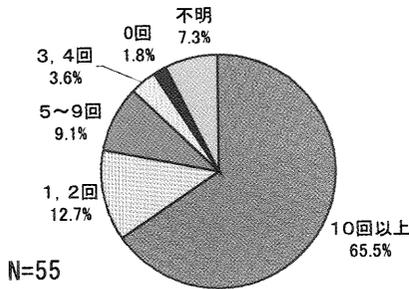


図17 観光客の海外旅行経験数

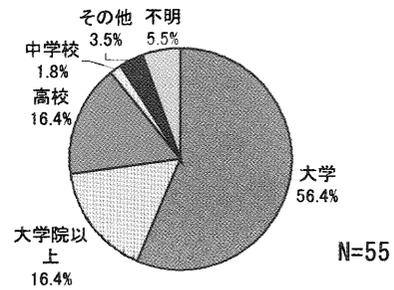


図18 観光客の最終学歴

以上をまとめると、バリオを訪れる観光客はヨーロッパを中心とした外国人であり、海外旅行経験に富む高学歴の20代、30代の若い男女である傾向がみられた。彼らは扶養家族がないため可処分所得が多く、また自由にできる時間を持ち合わせていた。全旅行日程は、短期のものから1年に達する長期のものまで幅がみられたが、バリオに滞在する日数は、1週間以内と短い傾向にあった。

4-3 観光対象

観光客にとっての観光対象を明らかにするため、まず、質問項目「なぜバリオを訪れたのか」、そして「バリオ観光の魅力はなにか」の回答から整理していく。

「なぜバリオを訪れたのか」の設問では、回答者が当てはまると思う項目の全てに印をつけてもらった。項目の設定に際しては、一般的に観光客が最初に情報を入手する手段であろうガイドブックやインターネットで紹介されている「バリオで何ができるか」に関わる事柄を参考にした。

最も多かった回答は「トレッキングをするため」であり、回答者の81.8%の人が挙げていた。次いで「地域の人達との交流」、「ロングハウスをみる」が約70%、「伝統的な生活様式を体験する」、「野生動植物をみる」、「珍しい体験をする」などがほぼ同列で約60%の人から挙げられていた。「その他」に挙げられていたのは、「プナン族を訪れるため」、「手つかずの森林を見るため」、「友人に会うため」などであった(図19)。一方、気候やコストに対する関心は、際だって低かった。

「バリオ観光の魅力はなにか」については、「目的」とほとんど変わらない項目に加え、実際に訪れてみてわかることとして、宿泊施設やガイドなど、地元の人々が関わっている事柄や、全体の雰囲気に関わる項目を新たに設けた。最も多かった回答は「トレッキング」で、74.5%の人が挙げていた。次いで「地域の人達との交流」、「俗化されていない地域・人々」、「ロングハウス」が約70%、「伝統的な生活様式」が60%、「景観」、「野生動植物」、「静けさ」などが約50%であった(図20)。「その他」では、「プナン族」、「食べ物」、「孤立した土地であること」などが挙げられていた。

ここで、トレッキングをバリオ訪問の目的にあげなかった10人に焦点を絞り、「目的」に関する回答をみると、地域の人々との交流(7)、伝統的生活の体験(6)、ロングハウスの見学(6)

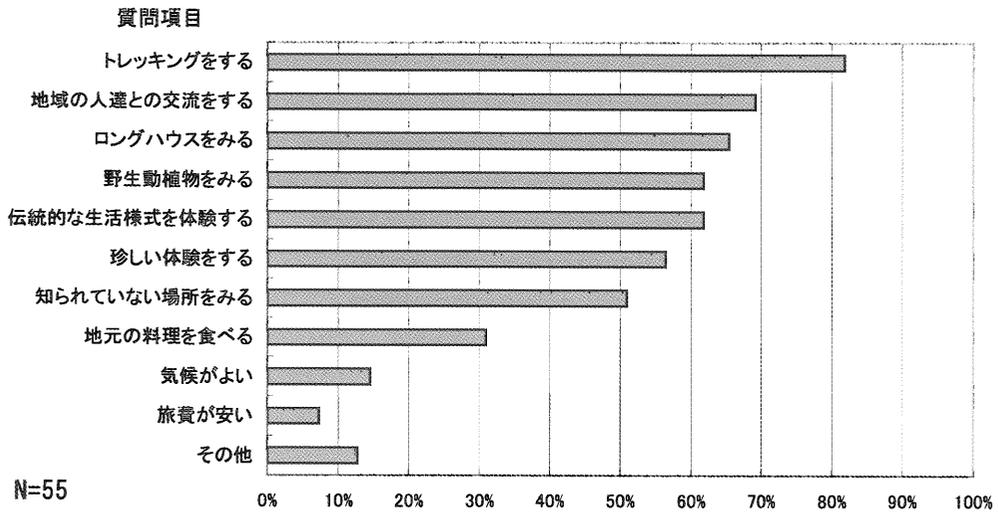


図19 「なぜバリオを訪れたのか」に対する観光客の回答

があがっていた。またバリオの魅力に関しては、ロングハウス（9）、人々との交流（8）、俗化されていない雰囲気（8）が上位にあがっていた。すなわち、バリオを訪れる観光客の大半はアウトドア志向であるが、一部に文化志向の人々もいるということがうかがえる。

全体に、当初の目的と実際に訪れての感想はほぼ一致していたが、やや差のあったトレッキングと地元社会や文化との距離が、訪れた後には同列になっていた。また目立ってポイントの下がった項目として「野生動植物」がある（図20）。

このような回答の上がる背景を理解するには、バリオの自然環境に目を向ける必要がある。ケラビット高原は、図3からもうかがえるように、バリオ周辺の低地と、それを囲む山地により構成されている。低地の植生は主として、ケイ酸を多く含む土壌溶脱のすすんだ土地に成立するケランガス林と湿地から成っている。ケランガス林は、ボルネオ島に顕著な固有の植生には相違ないが、貧栄養土壌ゆえ植物層はたいへん貧弱である（Whitmore, 1988）。またトレッキングコースは、主としてバリオから東、あるいは南の方に向けて整備されているが、それらはバリオ地区以外にあるロングハウスを結んでいる人々の通り道でもある。道中の植生には、焼畑や放牧地跡に成立した二次林も多く含まれている。バリオを訪れる観光客が、こうした知識をもって訪れているとは考えにくく、うっそうとした熱帯雨林を想像していると、結果は期待はずれとなる。

次に「バリオ、およびバリオの観光の特徴に対する重要度と満足度」について調査・分析を行った。ベネフィット・ポートフォリオ法の考え方にもとづき、観光地としてのバリオ地域全体の環境・空間を観光客の視点で評価した。観光客は観光地を選ぶとき、なんらかの決め手となった魅力や観光対象があったはずである。ここではバリオの魅力や観光対象となり得る17項目を挙げ、それぞれの観光誘引の度合、すなわち重要度と、満足度を評価してもらった。

その際、重要度と満足度がともに高い場合を「長所」、重要度が高く、満足度が低い場合を「改

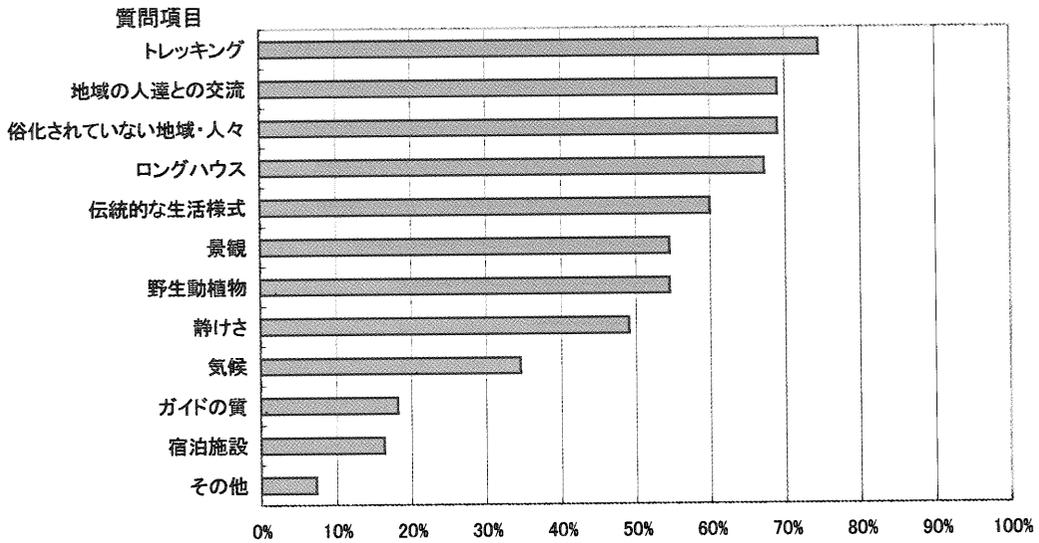


図20 「バリオ観光の魅力はなにか」に対する観光客の回答

善の必要性が高い」、重要度が低く、満足度の高いものを「そのままでも差し支えない」、重要度と満足度がともに低い場合を「無視してもかまわない」とした。評価は5段階で、回答によってはカテゴリーの境界線上にくる点もある。そこで、線上にある点で「改善の必要性が高い」に隣接する場合を「改善の必要性を検討してもよい」、隣接しない場合を「そのままでも差し支えない」とし、合計5つにカテゴリー分類を行った(図21)。

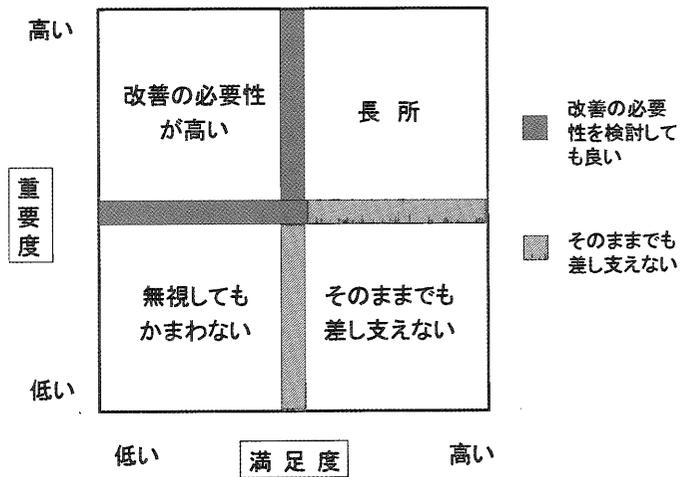


図21 ベネフィット・ポートフォリオ法の概念図

その結果からは、「静かである」、「俗化されていない」、「ガイドの質」、「治安が良い」、「伝統的な生活様式を残して生活している人々をみる」などが長所としてあげられている割合が高かった。ガイドに関しては、先の魅力かどうかの設問ではとくに評価されていなかったが、質に関する不満もあがっていない。「改善の必要性が高い」、「改善の必要性を検討してもよい」の2つの項目の割合が高かったものは「野生動物の観察」、「伝統的生活の解説」、「トレッキングコースの整備」などであった(図22)。しかし野生動物に関しては、当初の目的に対して実際に訪れての魅力が減

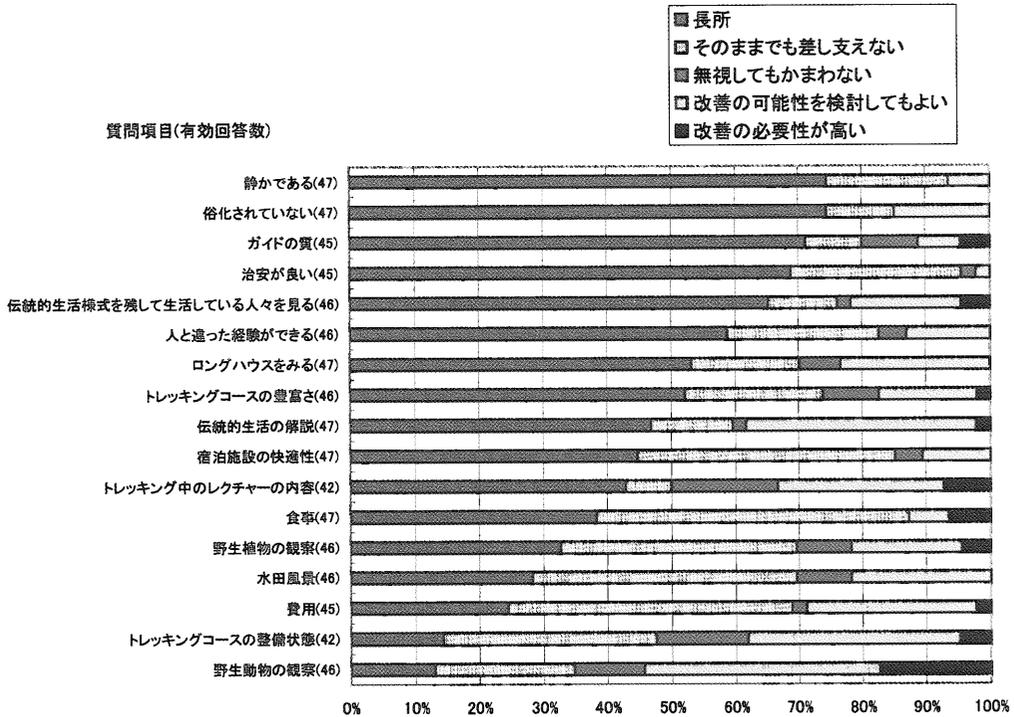


図22 項目別評価カテゴリーの割合

少している項目でもあるが、動物相そのものを改善するわけにはいかないのも確かである。

各項目の平均値の分布をみると、ほとんどの項目が「長所」に分類されており、「そのままでも差し支えない」に数項目が分類されていた。「改善の必要性が高い」と分類されたのは「野生動物の観察」であった(図23)。しかし前にも述べたように、ボルネオ島にはそれほど珍しい大型ほ乳類がいるわけではなく、象徴的な存在としてのオランウータンも、バリオ周辺ではみかけない。サイチョウに出会うことも希であり、改善できるとすれば、むしろ植物相の解説を充実させるぐらいであろう。

バリオ集落内における「土産物の種類と数」、「飲食店の種類と数」、「娯楽施設の種類と数」、「集落内の移動手段」の4項目については、「バリオ内ではこれらの設備や施設が少ないといえる」という前提をおいた上で、それらの点についてどのように感じるかと質問し、重要度と満足度の指標で5段階に評価してもらった。それぞれの項目について前述の5つの分類に基づき結果をまとめたのが図24である。数や種類、移動手段が少ないことを長所として感じている人は少ないものの、ほとんどの人にとっては重要度が低く、その結果、「そのままでも差し支えない」、「無視してもかまわない」というカテゴリーに区分されることとなった。「改善の可能性を検討してもよい」および「改善の必要性が高い」と分類される回答割合が最も多い項目は「土産物の種類と数」であった。

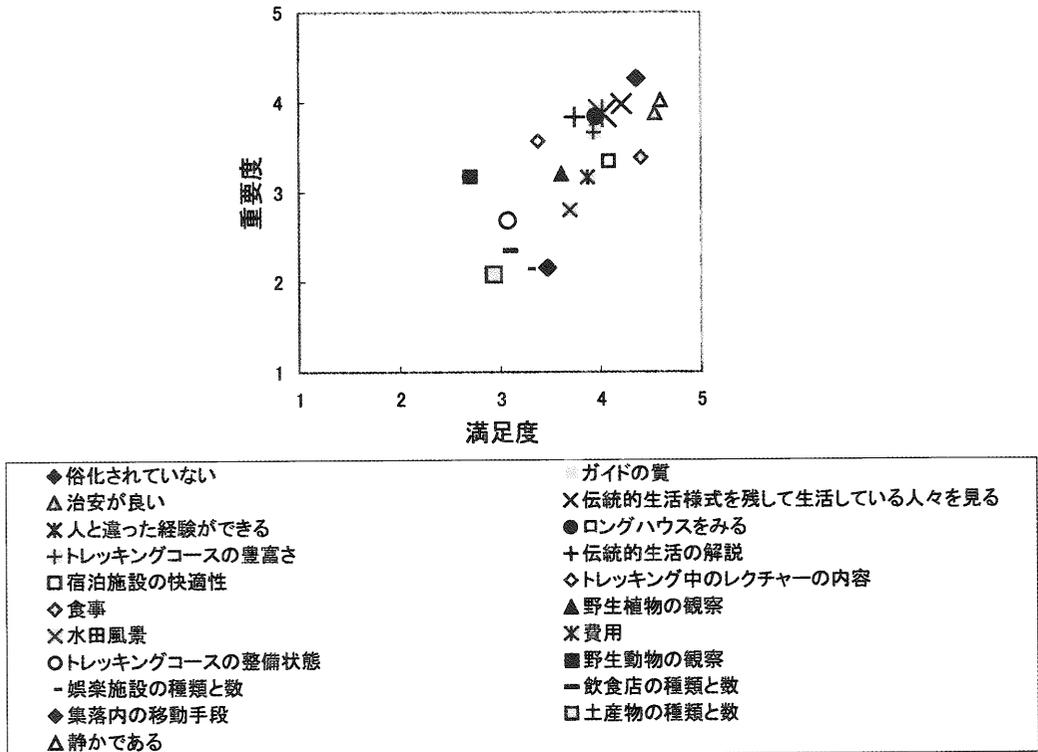


図23 各項目の平均値の分布

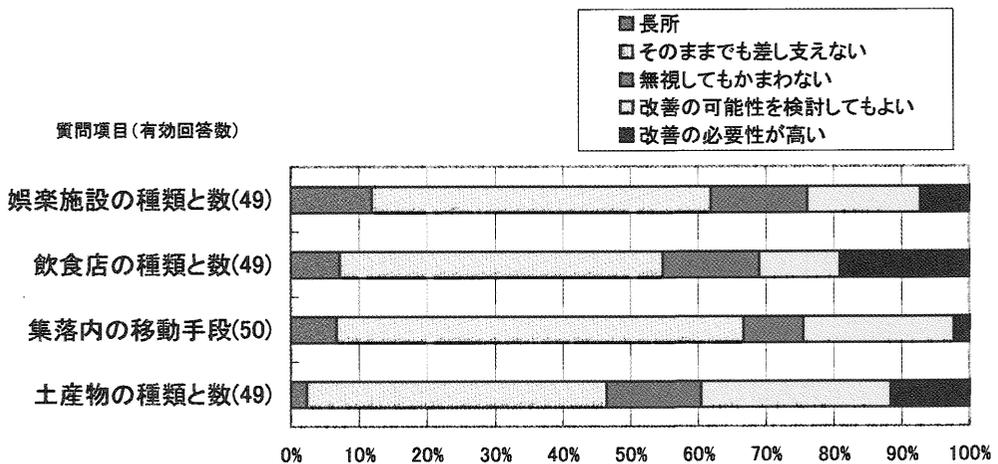


図24 項目別カテゴリーの割合

この点に関しては、バリオ地区の商店でカゴなど多少のハンディクラフトは販売されている。しかし実際には地元で生産されたものではなく、多くはインドネシア側から仕入れたものである。

5. 地域住民に対する意識調査

5-1 調査方法

バリオには9棟のロングハウスが存在するが、サンプルとして、空港から比較的近くにあり、ホームステイプログラムを観光客に提供している世帯が住んでいるロングハウス1つと、少し離れた場所にあるロングハウス2つを選んだ。その中から、都市部に移住している世帯、一時的にロングハウスを離れて生活している世帯を除き、残り全ての世帯を訪問し、合計35世帯に対し聞き取り調査を行った(表2)。方法としては、各戸の代表者1人に対し、事前に作成した質問項目に沿って聞き取りを実施した。実際にロングハウスに残っているのは高齢者が多く、ケラビット語で聞き取る必要があったため、英語-ケラビット語の通訳を介した。当然のことながら、通訳者には住民からの回答を忠実に英語に訳すよう依頼した。

表2 サンプル世帯数

ロングハウス	全戸数	居住世帯数	聞き取り調査実施世帯数
A	25	17	17
B	12	9	8
C	11	10	10
合計	48	36	35

質問項目は世帯構成員の属性、生計手段、観光客との関わり、観光地としてのバリオの魅力、および観光業に対する期待と不安である。ただし属性のうち年齢に関しては、それを記録する習慣がないため、設問から省いた。

さらに、観光媒体を担っている宿泊施設オーナーとガイドにも聞き取り調査を行った。宿泊施設については、ホームステイプログラムを実施しているロングハウスを含めると、飛行場から徒歩で1時間半以内の場所に7軒ある。オーナーが不在であった1軒を除き全ての宿泊施設に聞き取り調査を行い、実際に宿泊した。ガイドはバリオに18人存在するが、調査期間中は農繁期と観光シーズンとが重なり、皆多忙であった。その中でバリオに居住し、調査協力を承諾してくれた4人から聞き取りを行った。これらの人々に対しては英語で直接質問し、回答を得た。また、調査期間中バリオ中心部において営業をしていた商店は15軒あるが、そのうち協力を拒んだ1軒を除く14軒に観光業との関わりや取り扱い商品についての聞き取り調査を行った。

5-2 地域住民像

まず、地域住民の収入源からみていきたい。ここでは、とくに断りのない限り、ロングハウス

(35), オーナー (5), およびガイド (4) を地域住民とよぶことにする。

地域の主な産業は農業であり、主産物は水稻である。ロングハウス住民だけを見ると、高齢のため隠居している1世帯を除く全世帯が農業に従事しており、うち80.0%が専業農家であった。バリオで栽培される米は、マレーシア国内でも最高の等級に分類され、バリオ米というブランドで高値取引される(表3)。畑作物としては、パイナップルもよく知られているが、郵送手段が空路に限られるため、域外にはほとんど流通していない。

農業以外の収入源としては、観光業の他に公務員、牧師、商店経営、狩猟、出稼ぎなどがあげられたが、稲作を上回る収入源は少ない。また、都市で働いている子ども達から仕送りをしてもらっている世帯も多い。仕送りは形態には、日用品や工業製品などの物資を送ってもらう場合と、送金がある。ロングハウス住民の間では、71.4%が仕送りを受けていた。

次に支出であるが、これは大まかに食費、薪、電気、ガス、ガソリン、農業労働者の労賃、その他に分けることができる。

支出の詳細を調査することのできたほとんどの家庭で、一番大きな割合を占めているのが食費であった。購入している主なものは、コーヒー、紅茶、チョコレートドリンク、砂糖、食用油である。また4-2の表1からもわかるように、大半の商店はこれらの食品をおいている。

薪は、ガスレンジのない家庭ではもちろん、ガスレンジがある家庭(42.9%)でも毎日消費される必需品である。ケラビットのロングハウスでは、囲炉裏が重要な位置を占め、ロングハウス

表3 米の価格

単価 (RM/Kg)	調査場所	産地
4.17	バリオ	バリオ
4.00	ミリ	不明(香米)
3.50	ミリ	サラワク
2.40	ミリ	ベトナム
2.20	ミリ	サラワク(3銘柄)
2.00	ミリ	ベトナム
1.90	ミリ	タイ
1.80	ミリ	サラワク
1.65	ミリ	ベトナム
1.50	ミリ	サラワク(ベトナム米25%混合)
1.50	ミリ	中国
1.45	ミリ	サラワク(インド米35%混合)
1.30	ミリ	タイ米、ベトナム米混合
1.10	ミリ	サラワク

注：ミリ市内の店頭調査(2003年8月1日および8月29日)による。ミリではこの時期、バリオ米の入手が困難であり、バリオ米の価格はバリオでしか調査することができなかった。

内の共通スペースに各家庭の囲炉裏がしつらえられ、火の周囲が社交の場となっている。またガスレンジをもっている家庭でも、ガスボンベは輸送費が加算され、非常に高価で入手も困難なことから、緊急用、非常用として補助的に使用していた。薪の価格は、通常1束（約2m³程度）約500RMである。ロングハウスに住んでいる世帯では、57.1%が高齢や多忙の理由により、薪を購入していた。

発電機には軽油を利用しているが、これも輸送費がかかるため1ガロン（米ガロン＝約3.8リットル）あたり18RMと非常に高価である。個人で発電機を所有している場合は個人の使用時間に合わせて負担額にも差があるが、ロングハウス共用の場合は1世帯あたり月に30RMの使用量を支払っていた。ロングハウスの発電機の稼働時間はおよそ夕方6時から9時頃であり、電灯のために動かしていた。他にもランプなどが併用されていた。太陽電池による発電も政府施設や個人宅の一部に使用されていたが、初期投資にかかる金額が高額なため、普及していなかった。

ガソリンの消費はオートバイや自動車を所有している世帯に限られる。ロングハウスに住んでいる世帯のうち48.6%がオートバイや自動車を所有していた。ガソリンの消費量は使用頻度によるが、やはり1ガロンあたり19RMと高価である（表4）。

ロングハウスに住んでいる世帯のうち、高齢の1世帯を除く34世帯に、不足した労働力をどのように補っているのか質問したところ、91.2%の世帯でインドネシアからの出稼ぎ労働者に依存していることがわかった。水田面積や作業内容によって多少の賃金差はあるものの、支払い労賃総額は1世帯当たり年間約1,200RMから1,800RMであった。さらに、労働者の滞在中は、宿泊場所を提供するだけでなく、食事などの全て雇い主が提供しなければならない。

人口の都市流出は、今の若い世代だけにいえることではなく、今ロングハウスに居住している世帯の間でも、37.1%の世帯構成員がバリオの外で働いた経験をもっていた。聞き取りを行った宿泊施設オーナーとガイドは、全員一時はバリオの外で生活をしていたUターン者であった。

その他の支出としては、子どもの教育費、日用品の購入などがあげられていた。教育費については、バリオ外における教育費の負担は大きい。日用品の消費量および品目は世帯の構成員により差はあるため、正確に把握することが困難であった。以上のロングハウス居住世帯の概況をまとめたものが、表5である。

5-3 地域住民と観光のかかわり

観光客と地域住民との関わりについては、立場により大きな違いがみられた。宿泊施設オーナーは観光客に宿泊場所を提供するだけでなく、食事の用意、観光客の日程や希望にあわせてコースの選定、ガイドの斡旋など、バリオ滞在中の観光客の世話を全面的に行う。ガイドは観光客に直接連絡をとることはなく、ほとんどの場合、宿泊施設オーナーからの要請に応えるかたちで仕事を得ている。宿泊施設オーナーはガイドの能力を熟知しており、観光客の日程や希望にあわせて最適と思われるガイドを観光客に斡旋しているのである。

観光客は商店に買い物に出かけることで商店とも関わりをもっている。商店オーナーによると、観光客が主に購入するものは水やジュースなどの飲料、およびチョコレートなどのスナック類で

表4 バリオとミリにおける商品店頭販売価格

	品目	単位	単価 (RM)		価格比
			バリオ*	ミリ**	バリオ/ミリ
嗜好品	ミネラルウォーター	1500ml	4.8	1.2	4.0
	清涼飲料水 (缶)	350ml	2.7	1.0	2.7
	ビール (缶)	350ml	5.0	2.0	2.5
	脱脂粉乳	700g	15.0	7.0	2.1
	クラッカー	1袋	4.6	2.6	1.8
	ミロ	200mg	5.1	2.9	1.8
	インスタントコーヒー	50g	5.8	3.4	1.7
	ビスケット	1袋	3.1	1.9	1.6
	紅茶 (ティーバッグ)	25bgs	5.3	3.4	1.6
食品	ラーメン (乾麺)	1袋	1.0	0.2	5.0
	砂糖	2kg	8.0	3.1	2.6
	醤油	350ml	3.9	1.7	2.3
	食用油	2kg	11.8	5.4	2.2
	卵	1個	0.5	0.3	2.0
	トマトケチャップ	300ml	3.0	2.1	1.4
生活雑貨	石けん	50g	1.5	0.6	2.5
	ろうそく	6本	3.0	1.2	2.5
	鍋	1個	39.5	20.0	2.0
燃料	プロパンガス	25kg	150.0	20.0	7.5
	軽油	1gallon	18.0	3.5	5.1
	ガソリン	1gallon	19.0	6.0	3.2

* バリオ内商店14軒の店頭価格の平均値

** ミリにある大型量販店での店頭価格 (調査日2003年8月29日)

ある。商店の中には軽食を出す店もあるが、バリオ滞在中の観光客は3食を宿泊施設で摂ることがほとんどであり⁷⁾、商店で食事をする機会は、食事を準備しきれない宿泊施設オーナーに頼まれたときに限られていた。観光客が店を訪れる頻度は観光客の性格や日程、シーズンにもよるが、さほど多くないことがうかがえた。

ロングハウスのサンプル世帯に「観光客との関わり」を尋ねたところ、「昔ガイドをしていた」、「一度だけホームステイさせたことがある」、「時々話をする」など、今までに観光客と何らかの関わりをもったことがある世帯は40.0%であった。しかし、現在も何らかの関わりをもっている世帯は11.4%であり、観光客との関わりから収入を得ている世帯は5.7%にすぎなかった。観光客との間接的な関わりとしては、宿泊施設オーナーに対する食材の販売があげられる。

表5 ロングハウスを対象としたサンプル世帯の概況 (n=35)

項目	割合 (%)
農業を営んでいる世帯	97.1
専門農家	80.0
何らかの仕送りを受けている世帯	71.4
ガスコンロをもっている世帯	42.9
薪を使用している世帯	100.0
薪を購入している世帯	57.1
オートバイもしくは自動車を所有している世帯	48.6
稲作にインドネシア人を雇う世帯	91.2*
世帯員にバリオの外で生活をした経験をもつ人がいる世帯	37.1

注：高齢により農業を営んでいない1世帯を除く34世帯中の割合

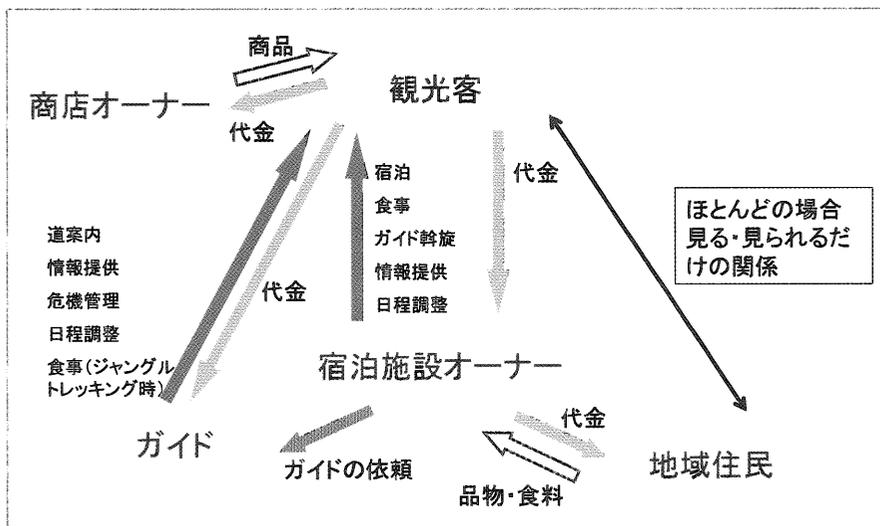


図25 観光業における住民の役割と観光客との関係

以上の関係をまとめると、図25のようになる。

5-4 地域住民の考える観光対象

地域住民の考える観光対象を明確にするため、地域住民に対し、「バリオには現在、観光客が訪れていますが、あなたの考えるバリオの観光対象を教えてください」という質問をした。また、回答を導き易いように、観光対象を「植物」、「動物」、「文化」、「歴史」、「地域社会」、「生活様式」、「食物」、「その他」の8つの項目にわけ、1つずつ順に聞き取りを行った（図26）。

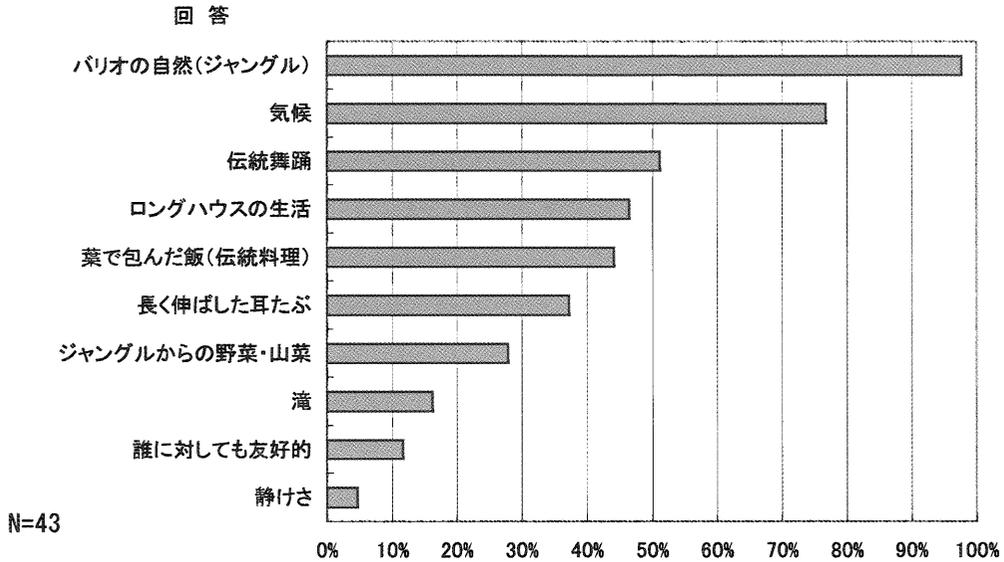


図26 地域住民（ロングハウス住民，オーナー，およびガイド）の考えるバリオの観光対象

最も多かった回答は「バリオの自然」であり、97.7%の人が挙げていた。聞き取り調査を進めていくうちに、「森林は我々のスーパーマーケットである」という表現をよく耳にした。空路の拡充により、今日では様々な物資がバリオにもちこまれるようになったが、食生活は依然として採集や狩猟により支えられている。地域住民が「バリオの自然」というとき、そこには周囲の森に存在する植物、動物などすべてが含まれ、それを身近で魅力的、かつ不可欠な存在であると認識していることがうかがえた。他に、数種の希少価値のある動植物の名前などを挙げる人、眺めのいい場所や巨石遺跡のある歴史的な場所などを挙げる人も多く存在した（表6）。

次に多く挙げられていたのが「気候」であり、76.7%の人が挙げていた。標高約1,100mのバリオは、ほぼ赤道直下にありながら、日中も涼しく過ごしやすい気候である。

3番目に多いのが「伝統舞踊」であり、51.2%の人が挙げていた。ケラビットの間では、最初の子どもが生まれたときと初孫が生まれたときに改名する習慣がある。その際、大勢を招いて盛大なパーティを行う。パーティは様々な余興を伴い、そのうちのひとつが伝統舞踊である。最近では、観光客から希望があがれば、伝統舞踊を披露するグループが組織されている。

4番目は「ロングハウスの生活」であり、46.5%の人が挙げていた。「ロングハウスの生活」には、その建築様式と共同生活という2つの側面が含まれており、回答者のほとんどがその両面を魅力としてあげた。

それとほぼ同じ数の人々が、「伝統料理」をあげている。食物を観光対象と考える地域住民のほとんどが、具体例として「葉で包んだ飯」をあげていた。これは柔らかく炊いた米をつぶし、葉で包んだもので、日常の食事ももちろん農作業などの際の携帯食として、今でも常食されている。その他の伝統料理に、葉で包んだ肉料理、竹筒に米や肉を入れて火にかける料理などがあり、こ

表6 地域住民の考えるバリオの観光対象（少数意見）

	回 答	
活 動	<ul style="list-style-type: none"> ・トレッキング ・山登り ・野外での食事 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンティング ・魚釣り
動植物	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒョウの観察 ・ハチの観察 ・シベットキャットの観察 ・マングースの観察 	<ul style="list-style-type: none"> ・フクロウの観察 ・ヘビの観察 ・ランの観察 ・ウツボカズラの観察
伝統・文化や生活	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の生活や知識について教える ・現地の生活を体験 ・キリスト教を守っている ・竹の楽器 ・ハンディクラフト ・米作りの様子 ・狩りの様子 	<ul style="list-style-type: none"> ・古いロングハウスの存在 ・伝統的な髪型をしている人々の存在 ・握手をして挨拶をする人々の存在 ・ケラビットの精神 ・首飾り ・墓地 ・水牛を飼っている
食 事	<ul style="list-style-type: none"> ・米を揚げたもの ・肉の串焼き ・ポットを使った料理 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統的な料理の方法 ・新鮮な食材 ・魚料理（田植えの前に捕獲する小魚を利用）
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・平和な状態 ・塩泉 ・わからないが観光客はバリオに興味をもっているようだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・良い地域として選ばれている ・プナンの人達

れらについても少数ではあるが言及していた。一方で、「観光客は伝統的な料理は嫌いだろう」、「観光客は伝統的な料理を食べたことがないだろう」などの理由で「観光対象にはなり得ない」と否定するものもいた。

6番目に「長く伸ばした耳たぶ」が挙げられていた。キリスト教や教育の浸透とともにこの習慣は消滅し、今では一部の年長者の間に残っているにすぎない。また、クチンやクアラルンプールなど都会に出かける際に恥ずかしいという理由で、手術により耳たぶを縮める人々も少なくない。

調査実施前は、空港に近く、観光客が多く訪れるロングハウスAと、離れた場所にあるロングハウスB・Cの間では、観光業や観光客に対する意見に違いがみられると想定したが、結果をみると意見に大きな差はなかった。A ロングハウスでは、ホームステイプログラムを観光客に提供し

ている世帯が1世帯あるが、同じロングハウスにあってもそれ以外の人々が観光客に直接接する機会は限られており、その結果、意見に差がみられなかったものと考えられる。

また、観光客との接触が多く、観光客の興味を知りつくし、バリオを客観的に判断する立場にある宿泊施設オーナーやガイドの回答は多岐に亘り、詳細である傾向がみられた。

5-5 観光業に対する期待と不安

地域住民に対し、「バリオは現在、観光客が訪れる地域になっていますが、バリオの観光業に対する期待と不安を教えてください」と質問をした。また、回答を導き易いように期待と不安を「経済」、「自然」、「社会」、「その他」の4つの項目にわけ、1つずつ順に聞き取りを行った(図27、および表7)。

まず観光業に対する期待であるが、回答した全員から「収入の増加」が挙げられていた。理由としては、観光客が増え観光業に何らかの形でつながりをもつことができれば新たな収入源となり得るであろうとのことであった。

次点で多く挙げられていたのが、「多くの住民が自然環境を守ろうとする」、「観光客のもっている環境に対する強い責任を見習う」、「観光客の良い習慣を知る」の3つであった。理由としては

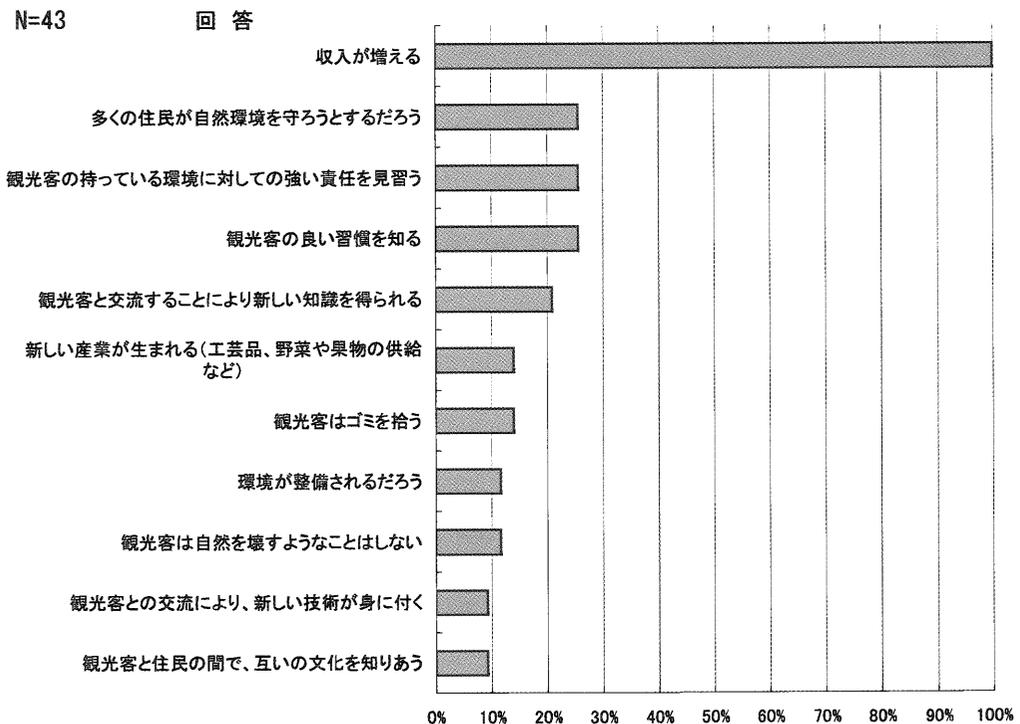


図27 観光業に対する地域住民（ロングハウス住民，オーナー，およびガイド）の期待

表7 観光業に対する地域住民の期待（少数意見）

	回 答	
生活環境	<ul style="list-style-type: none"> ・雇用の創出 ・ロングハウスの維持 	<ul style="list-style-type: none"> ・現代的な生活 ・観光客を見習って住民がゴミを拾うようになる
知 識	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客と地域住民の相互理解 ・観光客のもつ自然保護管理に関する知識 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民の会話能力向上（英語） ・観光客のもつ良い習慣
地域開発	<ul style="list-style-type: none"> ・観光収入の地域還元 ・公共施設の整備促進 ・文化情報発信センターの建設を期待 	<ul style="list-style-type: none"> ・バリオの宣伝効果 ・観光収入の公平な分配 ・伐採道路の貫通
観光客に対する要望	<ul style="list-style-type: none"> ・ガイドに従い自然を大切に ・現行の観光形態のエコツーリズムへの移行 	<ul style="list-style-type: none"> ・少しはマレー語を習得する ・観光客の様々な要望に応えられるようにしたい

「観光客がゴミを拾っているのをみた」、「観光客は美しい場所が好きである」、「観光客に満足してもらうために自然を守ろうとするだろう」、「観光客は自然にとっても気を遣っている」などであった。しかし、これら3つは、「収入の増加」の次点でありながら、回答者数はわずかに25.6%であった。

観光業に対する不安は同じ回答が少なく、地域住民の不安は様々であった（図28）。「若者が飲酒や喫煙などの習慣を覚える」が最も多く37.2%の人が挙げていた。バリオでは、宗教上飲酒は好ましくないこととされている。公衆の面前で飲酒することは集落の取り決めて禁止されている。タバコに関しては、健康知識の普及とともに良くない印象をもっている。理由として挙げられていたのは、「観光業により収入が増え、お酒やタバコを買うことが容易になるから」、「観光客が飲んだり吸ったりしている姿に影響される」であった。

2番目に多かったのが「観光客の食料を準備できない」で、32.6%の人が挙げていた。理由としては「観光客が何を食べるのかわからない」、「地元の料理以外のものを提供する場合は外部から食材をもち込むことになるが、大量には運び込むことができない」、「食材を大量に、そして常時準備することができない」などが挙げられていた。

3番目に多い「悪いものが入ってくる」は、30.0%の人が挙げていた。ここでいう「悪いもの」とは犯罪や治安の悪化などであった。「観光客の中には良い人もいれば悪い人もいる」、「観光客の運んで来るものは良いものだけではなく、悪いものもある」、「新しいものや考え方が今までない問題を運んでくるのではないか」、「暴力的な考えが入ってくるのでは」などの意見が挙げられた。年配者の中には、善悪の判断ができない若者が誤った選択をする可能性があることを懸念するものもいた。

4番目に多かったのが「たくさんのお金を得ることで心がすさむのではないか」であり、23.3

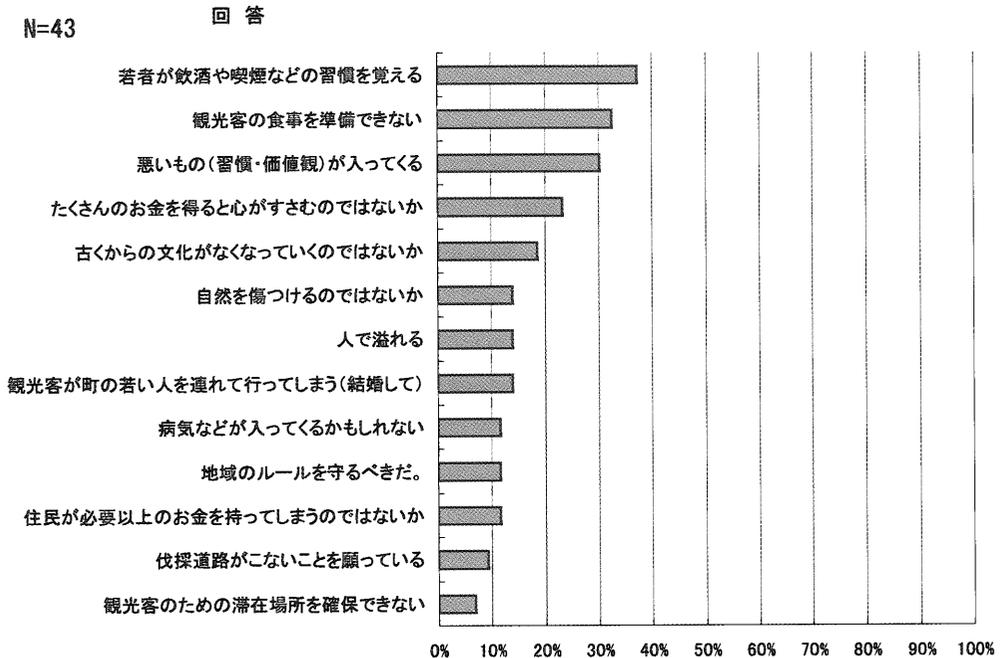


図28 観光業に対する地域住民（ロングハウス住民，オーナー，およびガイド）の不安

%の人が挙げていた。類似した意見として「若者がギャンブルや麻薬などへ興味をもつようになるのでは」、「儲けを追求するあまり、個人主義的な考え方になるのでは」などの意見もあげられていた。

5番目は「古くからの文化がなくなってしまうのではないか」であり、18.6%の人が挙げていた。地域住民が文化という時、形として残っているものだけではなく、精神的なことや価値観を指していることもうかがえた。例えばそれは「協力しあい、何でも分けあう精神」、「誰がきても心からもてなす気もち」、「争いごとを嫌い、平和を望む気もち」などである。

他にも「自然を傷つけるのではないか」、「観光客が若者を連れ出してしま(結婚して)」、「文化や価値観が違うことで、互いに非礼な行為があるかもしれない」などが挙げられていた(表8)。自然資源に対する不安が少数意見である背景には、これまでバリオを訪れた観光客は自然保護意識が高く、その態度が地域住民に好意的に受け止められていることがあると考えられる。それは4-2で述べた、高収入・高学歴というアンケートから導かれる観光客像とも一致している。

ロングハウスに住んでいる世帯と観光媒体を担っている宿泊施設オーナーやガイドでは、観光業に対する不安に若干意見の違いがみられた。ロングハウスに住んでいる世帯に比べ観光媒体を担っている人は、観光客の行動が地域の自然に対して何らかの圧力をかけているのではないかと、いうことを不安にあげるものが多かった。

表 8 観光業に対する地域住民の不安（少数意見）

	回 答	
社会変化	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統的な生活様式がなくなる ・地域住民の考え方が変わってくる ・伝統的相互扶助精神の喪失 ・バリオの個性の喪失 ・テレビ等の普及による隣人との関係の喪失 	<ul style="list-style-type: none"> ・違った宗教が入ってくる ・外国の生活様式をもち込まれる ・ホモセクシュアルなどの異なった価値観 ・観光客の肌の露出 ・観光客との意思疎通
経済変化	<ul style="list-style-type: none"> ・急速な貨幣経済の浸透 ・物価の上昇 	<ul style="list-style-type: none"> ・拝金主義的風潮 ・観光客の増大が住民の移動や物資輸送に対して与える圧迫
治安	<ul style="list-style-type: none"> ・治安の悪化 ・住民が暴力的になる可能性 	<ul style="list-style-type: none"> ・麻薬 ・賭博
環境変化	<ul style="list-style-type: none"> ・自然保護に関わる慣習を知らない観光客が、貴重動植物などを破壊 ・観光客の「見たい、したい」の要望に応えようとして自然が壊される可能性もある ・観光客による森林利用に対する規制やそれを監視する組織がない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミ処理の不安 ・トイレの数が不足し、下水処理能力も低い ・伐採道路の貫通
観光業に対する不安	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客の様々な要望にこたえきれない ・観光客のための移動手段が確保できない ・宿泊施設の不足 ・トレッキング中の観光客の遭難 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客によるバリオに関する負の情報の喧伝 ・観光客が退屈するのでは ・観光客との意思疎通 ・観光客の中には、バリオに関する負の印象を他の観光客に流す人もいる。

6. 考察

6-1 観光資源としてのバリオ

観光客は、自国にはない自然をもとめ、トレッキングを通じてその自然に触れるとともに、伝統的な生活様式に接し、地域の人々との交流を求めてこの地を訪れ、それらの要求は概ね満たされたと感じていた。しかし住民側の認識は、自然に関しては齟齬がないものの、自らの生活や文化を観光資源として認識しているものは約半数に留まっており、ほとんどが観光客と関わりをも

っていなかった。また、ベネフィット・ポートフォリオ法を用いた分析から導かれる観光客側からみたバリオ観光の長所は、「静かである」、「俗化されていない」、「ガイドの質」、「治安が良い」、「伝統的生活様式を残して生活している人々をみる」などであった。「ガイドの質」を除くこれらの項目は、バリオの中にあっては観光客を誘致するために特別に用意されたものではなかった。

逆にいえば、このように地域住民が無頓着であることがバリオの魅力をなし、不動の自然だけでなく、不変の人々の存在が、世界各地を旅し、経験を積んだ観光客にとっては安心感やささやかな満足感を与えるのではないかと考えられる。

すでに述べたように、ケラビット高原の自然は実際のところ、観光客がボルネオに対して抱く熱帯雨林のイメージとは異なる。バリオ地区は、中心部にある水田や放牧地を二次林やケランガス林がとりまいているし、一般的なトレッキングコースは、住民にとっては生活道路にすぎない。したがってそれゆえの簡便さがトレッキングに対する概ねの満足を与える反面、観察できる動植物に対する不満となって現れたものと思われる。

しかし、ひとたび高原をとりまく尾根を超えると、そこには保護区としての原生林が広がっている。通常のコースに飽き足らない観光客に対して、二次的自然とはまた異なる自然や、その接し方を用意することは可能であるが、そこまでとめる観光客は今のところ少ない。

一方、住民の考える観光対象として高原の「気候」があげられているが、敢えて熱帯の地を訪れたヨーロッパからの観光客にとっては、それは重要な要素をなしていない。

6-2 地域住民の観光業に対する期待と不安から

地域住民の観光業に対する期待は「収入の増加」であった。しかし観光業に伴う金や情報の流れの実態は、宿泊施設オーナーに一旦集中し、そこから分配されていくというものであった。それ自体には、過度の集中を排し、ガイド料に関しては中間マージンをとらず、直接ガイドに支払われるなど、ゆきとどいた配慮がみとめられたが、その枠組みを前提とした所得分配や観光客のもとめるふれあいには制約が生じる。

サンプルとしてA ロングハウスにおいては、ホームステイプログラムを運営している世帯が存在するが、調査期間中、観光客の滞在は途絶えることなく、好評であった(写真4)。ホームステイは、観光客にとって地域社会とのふれあいという要望が満たされ、低コストで滞在できるだけでなく、地域住民にとっても、宿泊施設を建設するのに比べてはるかに少ない初期投資で観光業への参入を可能にする。

しかしホームステイプログラム導入に際しては、留意すべき点もあげられる。観光客が地域住民の生活の場へ侵入してくることで、地域住民は常に見知らぬ人と共同生活をする事になり、価値観の相違等により精神的に負担を感じることも予想される。橋本(1999)は、自らの文化を防衛するためにも、観光客と関わる時間や空間を意図的に区別する必要性を指摘している。A ロングハウスにおけるホームステイプログラムの提供者は、隣接する世帯だけでなく、ロングハウスの全世帯に細かく心づかいをし、慎重に運営を行っていた。そこでは地域に根差した良識やバランス感覚が必要であり、運営は地域住民以外には不可能であると考えられる。



写真4 ホームステイプログラムに参加する観光客
(2003年8月1日，加藤撮影)

その他の観光業に住民が関与する可能性として、ガイドやポーターが考えられる。しかし、特にガイドに関しては、体力だけでなく英語力や自然に対する知識が要求されるため、一定期間ポーターとして経験を積む必要がある。

ベネフィット・ポートフォリオ法を用いた分析からは、「土産物の種類と数」についても改善の必要性が指摘され、またその結果住民に収入をもたらすことにもなる。しかしその際には、荷物の重量制限を伴う空路の移動を考慮する必要がある。現在日常生活の中で用いられているゴザやカゴなどのハンディクラフトがそれに適しているかは疑問であり、新たな商品や技術の開発が必要とされる。

次に地域住民の観光業に対する不安であるが、古川（1999，2001）はネパールにおける事例を通して、観光開発やその後の自然保全など外部から入ってきた価値観が地域住民の生活や地域の自然に大きな変容をもたらしたことについて報告している。その点、バリオの地域住民は的確に問題点を捉え、不安を感じているといえる。しかし、一方で現在バリオでは住民が求める・求めないに関わらず生活の中にプラスチック製品をはじめ様々な工業用品が入ってきており、半世紀前に比べ、その価値観や生活様式は激変している。工業製品はバリオにもちこまれることはあっても逆はなく、分解されない廃棄物は滞留する一方である。トレッキングコースに散乱するプラスチックごみは、むしろそこを生活上の移動経路として利用する地元住民によって廃棄されたものであり、それが地域住民の観光客に対する「観光客はゴミを拾う」、「観光客は美しい場所が好きである」、「観光客は自然にとっても気を遣っている」という肯定的な評価につながっている。

6-3 今後の展望

現在、バリオにおいて観光媒体を担っている宿泊施設オーナーやガイドは全てバリオもしくはバリオ周辺の地域住民である。地域の歴史や自然に関する知識に裏打ちされた地域住民による観光業の運営は、地域住民の生活に対する配慮や結果としての均衡を導きうる(図29)。特にバリオのような僻地の場合、観光業に限らず、全ての人は互いの協力と理解なしに生計を立てていくことは難しい。

島川(2002)は持続的な観光業の施行に地域住民が運営する重要性を説いた上で観光客、観光媒体、地域住民の3者が文化仲介者を通して相互理解を助け、利害関係を調節していくことの必要性を述べている。バリオにおいては、島川のいう文化仲介者としての働きをしているのは宿泊施設オーナーであった。

2002年まではインターネットがなく、遠方から確実に連絡を取ることは困難であった。また、1998年に新空港が整備される以前は、滑走路が土だったため、たとえ晴れていても前日の雨でぬかるんでいる場合はスケジュールが変更になるなど、観光客にとってバリオは遠い場所であった。

現在、状況は急速に変化してきている。空港整備以降の観光客数の増加に伴い、宿泊施設などの観光媒体も拡充してきている(図5)。2002年8月の時点で、ミリからバリオに入る航空便は週に4便であった。しかし、1年後の2003年8月には、週に9便まで増便されていた。需要があれば、航空会社は今後も増便するであろうことは想像に難くない。通信手段の整備や旅行者数の増加は、外部資本による観光投資のインセンティブとなる。それは現状では、観光客および地域住民ともに概ね肯定的に評価しているバリオの観光地としての姿を、一変させる可能性をもっている。

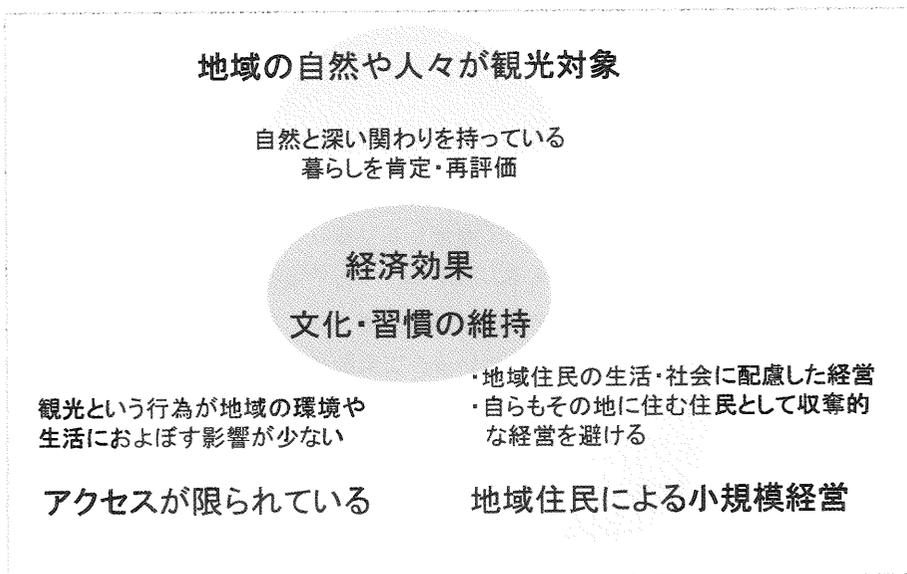


図29 バリオの観光業における均衡

現在、バリオには JKKK (*jawatan kuasa keselamatan dan kemajuan kampung*) とよばれる地方行政の窓口としても機能している住民会議が存在している。JKKK の最小単位は各ロングハウスであり、その上にロングハウスが何棟か集まって組織された議会があり、最大単位はケラピット全体に関わる事項を採択する議会である。JKKK での決定事項は出席者であるロングハウスの長を通じて各戸に伝えられている。その下部組織には観光部門も設けられているが、全体的な方針や問題点を検討し、解決策を実行する組織にはなっていない。ここ数年の急速な変化の延長上に到来する状況に備え、今から JKKK の機能を強化していく必要があると考える。

謝辞

本研究の観光客アンケートならびに住民ヒアリングの部分は、協力隊を育てる会「帰国隊員等人材育成奨学金」（代表：加藤亮）により実施したものである。また地域の概況に関しては、日本学術振興会科学研究費・基盤 A1「サラワク先住諸民族社会における自然認識の比較研究」（代表：内堀基光）による調査結果の一部を用いた。いずれも、サラワク側受入機関は主席研究員 Daniel Chew 博士を窓口とするサラワク開発研究所（Sarawak Development Institute, SDI）であった。また SDI 顧問の Jail Langub 氏からも調査に際しての助言をいただいた。GPS のデータ処理に際しては鷺坂隆太土地家屋調査事務所の鷺坂隆太氏にご協力いただいた。またバリオにおける調査に際しては、バリオ中学校長の Lucy Bulan 氏、もと森林局職員の David Laban 氏、バリオ開発・保険委員会の Lian Tarawe 氏をはじめとする多くの方々にお世話になった。聞き取り調査に快く協力してくださった地元の方々や観光客の方々など、すべての方々のお名前をここにあげることはできないが、著者一同、この場を借りて心からの感謝を捧げたい。

注

- 1) 調査地のバリオでも、2003年3月12日および13日に、州開発局およびサラワク開発研究所の主催により、観光業に関するワークショップが開催され、多くの住民が参加した。
- 2) 実際にそのルートでバリオに入った観光客より（2002年8月）。
- 3) バリオ住民に対する聞き取り調査より（2003年7月～8月）。
- 4) バリオの牧師への聞き取り調査より（2003年8月1日）。
- 5) バリオ保健所（Klinik Kesihatan Bario）の統計資料より。
- 6) バリオ住民への聞き取り調査（2003年8月1日）より。
- 7) Bario Tourism Survey（2002年12月より実施）によると、全回答者20人中18人が、「バリオ滞在中に食事をしたのは宿泊施設である」と回答していた。

引用文献

- 東徹 (1999) マス・ツーリズム批判と新たな観光のあり方の模索. 塚本圭一, 東徹編, *持続可能な観光と地域発展へのアプローチ*. 泉文堂, 東京.
- Bala, P. (2002) *Changing Borders and Identities in the Kelabit Highlands: Anthropological Reflections on Growing Up Near an International Border*. Unit Penerbitan Universiti Malaysia, Kota Samarahan.
- Borneo Post (2003年8月20日).
- 古川 彰 (1999) 環境の社会史研究の視点と方法. 船橋晴俊, 古川彰編, *環境社会学入門: 環境問題研究の理論と技法*. 文化書房博文社, 東京.
- 古川 彰 (2001) 自然と文化の環境計画. 鳥越皓之編, *自然環境と環境文化*. 有斐閣, 東京
- Harrison, T. (1949) Outside Influence on the Culture of the Kelabits of North Central Borneo. *Journal of the Polynesian Society* 58 (3) : 91-103.
- Harrisson, T. (1992) Stone and Kelabits in Interior Borneo. V. T.King (ed.), *The Best of Borneo Travel*. Oxford University press, New York.
- 橋本和也 (1999) *観光人類学の戦略: 文化の売り方・売られ方*. 世界思想社, 京都.
- 保母武彦 (1990) 内発的発展論. 宮本憲一, 横田茂, 中村剛治郎編, *地域経済学*. 有斐閣, 東京.
- Lonely Planet (2001) *Lonely Planet: Malaysia, Singapore & Brunei*. Lonely Planet, Victoria.
- 小方昌勝 (2000) *国際観光とエコツーリズム*. 文理閣, 京都.
- 岡本伸之 (2001) 観光政策. 岡本伸之編, *観光学入門: ポストマスツーリズムの観光学*. 有斐閣, 東京.
- プログ, スタンレー C, (1995). レジャー旅行: 思わぬ問題に直面する型破りな産業. シーアボルド, ウィリアム F.編 玉村和彦監訳, *観光の地球規模化: 次世代への課題*. 晃洋書房, 京都
- Schneeberger, W. F. (1979) *Contributions to the Ethnology of Central Northeast Borneo*. The University of Berne Institute of Ethnology, Zurich.
- 世界観光機関 (2002). *2001年国際観光概観*. 世界観光機関アジア太平洋事務所, 大阪.
- 島川崇 (2002) *観光につける薬: サステイナブル・ツーリズム理論*. 同友館, 東京.
- 塚本圭一 (2001) エコツーリズム. 徳久球雄, 塚本圭一, 朝水宗彦編, *地域・観光・文化*. 嵯峨野書院, 京都.
- Whitmore, T. C. (1988) *Tropical Rain Forests of the Far East*. 2nd ed. Oxford University Press, Oxford.
- WTO (2003) *WTO Asia-Pacific Conference on Sustainable Certification of Tourism Activities: Final Report*. WTO, Kuala Lumpur.
- 山上 徹 (1997). *国際観光マーケティング論*. 白桃書房, 東京

Summary

Malaysia is a major exporter of forest products in the world. The volume expanded during the latter half of 1980's and Sarawak was the main supplier. Increasing deforestation and conversion to plantations brought various changes in traditional lifestyle. As a consequence, migration from rural to urban areas took place.

Bario is located in the Kelabit highlands of Sarawak, surrounded by mountains up to 2,000 meters. There is no road access and only air route is available as a means of transportation. Though the main source of income is wet rice farming, geographical conditions limit distribution of agricultural produce. There has been a significant outflow of younger generation, looking for better job and education. As a result, depopulation and aging problem took place like in remote areas of developed countries.

On the other hand, such isolated location and existence of traditional longhouses have a potential of tourism development. After Western guidebooks started to introduce Bario, the number of tourists has increased. It can be assumed that development of tourism has created working opportunities and helped U-turn of younger people.

The objectives of this report are to find the present situation of tourism in Bario and analyze the necessity of improvement. Based on the results, potential of sustainable tourism development in interior regions will be discussed.

As the methods, structured questionnaires were used to collect information from the tourists. It was distributed to the guests and collected before they leave by the owners of all six lodges. Interviews to lodge owners, guides, shopkeepers, and local people were also carried out. In regard to respondents of local people, three out of nine longhouses in Bario were selected. One is located near the airport, presumed to have better contact with tourists. Other two are located relatively far from the airport. Benefit Portfolio method were applied to analyze the necessity of improvement.

The profile of the tourists is: European, young, enough disposable income, enough time, and high educational background, as often mentioned in references on eco-tourism. Most of them answered the main purposes to visit Bario were trekking, nature observation, sightseeing of traditional lifestyles, and interaction with local people, and they were satisfied with the results. Quietness, unspoiled people and guides, good security, still maintained traditional customs were pointed out as attractiveness of Bario.

The answers of the local people on the attractiveness were also similar. The largest difference was found that around 40% of them considered longhouses and their lifestyle were not attractive. It means local people do not aware that they themselves can be objectives of tourism. In regard to expectation and anxiousness on tourism, all of them responded that

tourism was a viable source of income, and a few were worried about the negative influence of tourists on their youth, such as alcohol drinking and smoking.

At this moment, tourism in Bario is supported by the balance of isolated location, selected tourists, and tourism developed by the local people. However, such a balance as a result can easily collapse, once the difficult accessibility is improved and consequently the number of tourists and influence of commercialism increase. Profit-oriented tourism brought by external capital and developers may cause not only socio-cultural change but also environmental degradation.

The fragility of tourism in Bario can be found in the point that the equitable balance is kept by probably involuntary awareness of the lodge owners. For further sustainable development of tourism in Bario, wider involvement of local people through establishment of tourism board, for instance, seems necessary.